

師範學校編纂小學讀本 假名附 二

特33

778

156

三本

大日本教育會書籍館

函架號

二	三	四
三册	三號	六架
		○函

師範學校編纂 假名附

# 小學讀本二

明治八年 文部省刊行  
八月改正

小學讀本卷之二

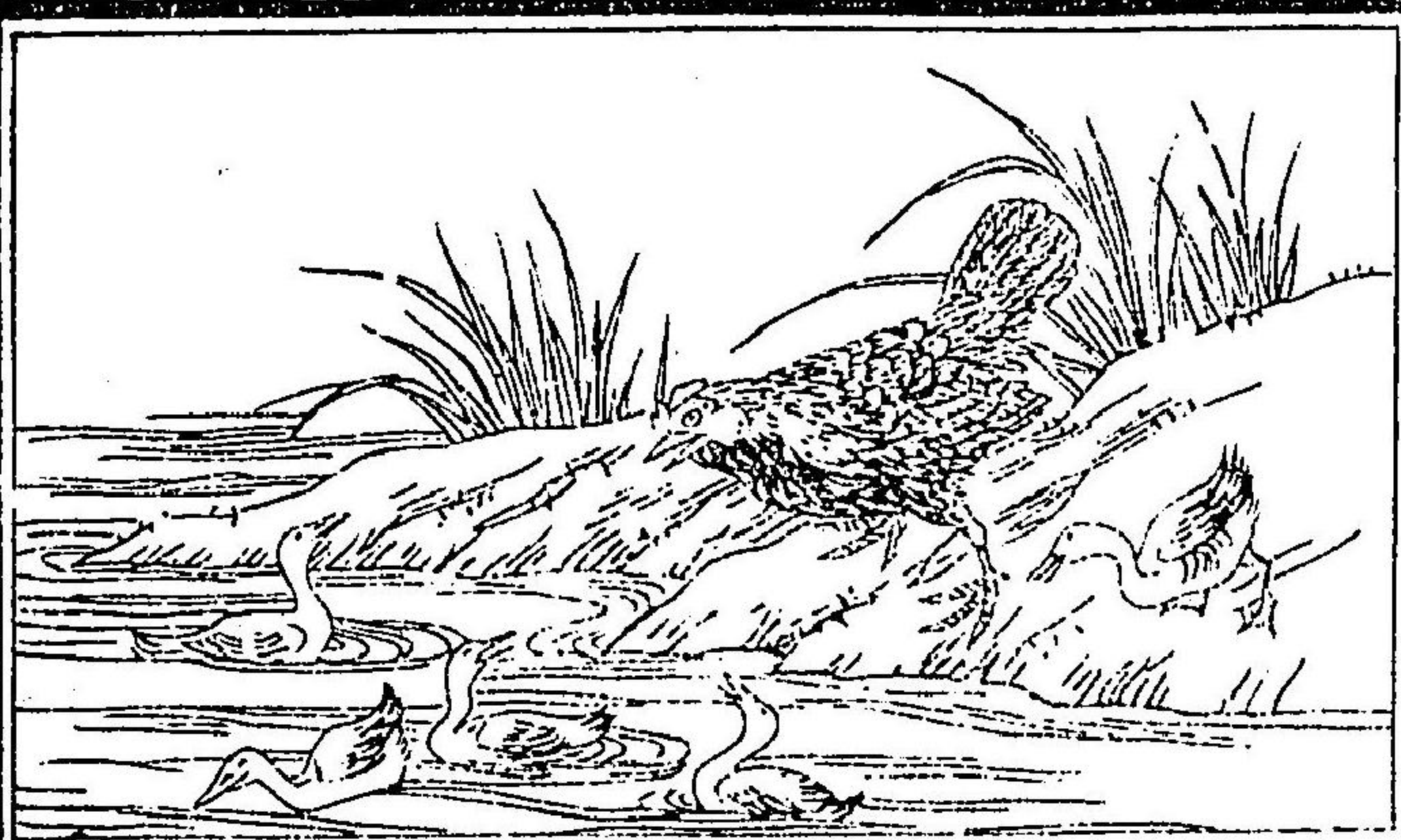
田中義廉 編輯  
那珂通高 訂正

第一  
此<sup>コノ</sup>女<sup>メ</sup>兒<sup>ゴ</sup>ハ、人<sup>ニシ</sup>形<sup>キヤウ</sup>を<sup>モ</sup>持<sup>テ</sup>  
り<sup>○</sup>汝<sup>ナチ</sup>も人<sup>ニシ</sup>形<sup>キヤウ</sup>を<sup>モ</sup>好<sup>ム</sup>  
う<sup>○</sup>我<sup>ワレ</sup>も甚<sup>ハナク</sup>こ<sup>ト</sup>を<sup>モ</sup>好<sup>ム</sup>  
め<sup>り</sup>○此<sup>コノ</sup>男<sup>ダン</sup>兒<sup>ゴ</sup>も人<sup>ニシ</sup>形<sup>キヤウ</sup>  
を<sup>モ</sup>持<sup>テ</sup>り<sup>ヤ</sup>○否<sup>イナ</sup>男<sup>ダン</sup>兒<sup>ゴ</sup>  
ハ人<sup>ニシ</sup>形<sup>キヤウ</sup>を<sup>モ</sup>持<sup>テ</sup>ど<sup>シ</sup>て



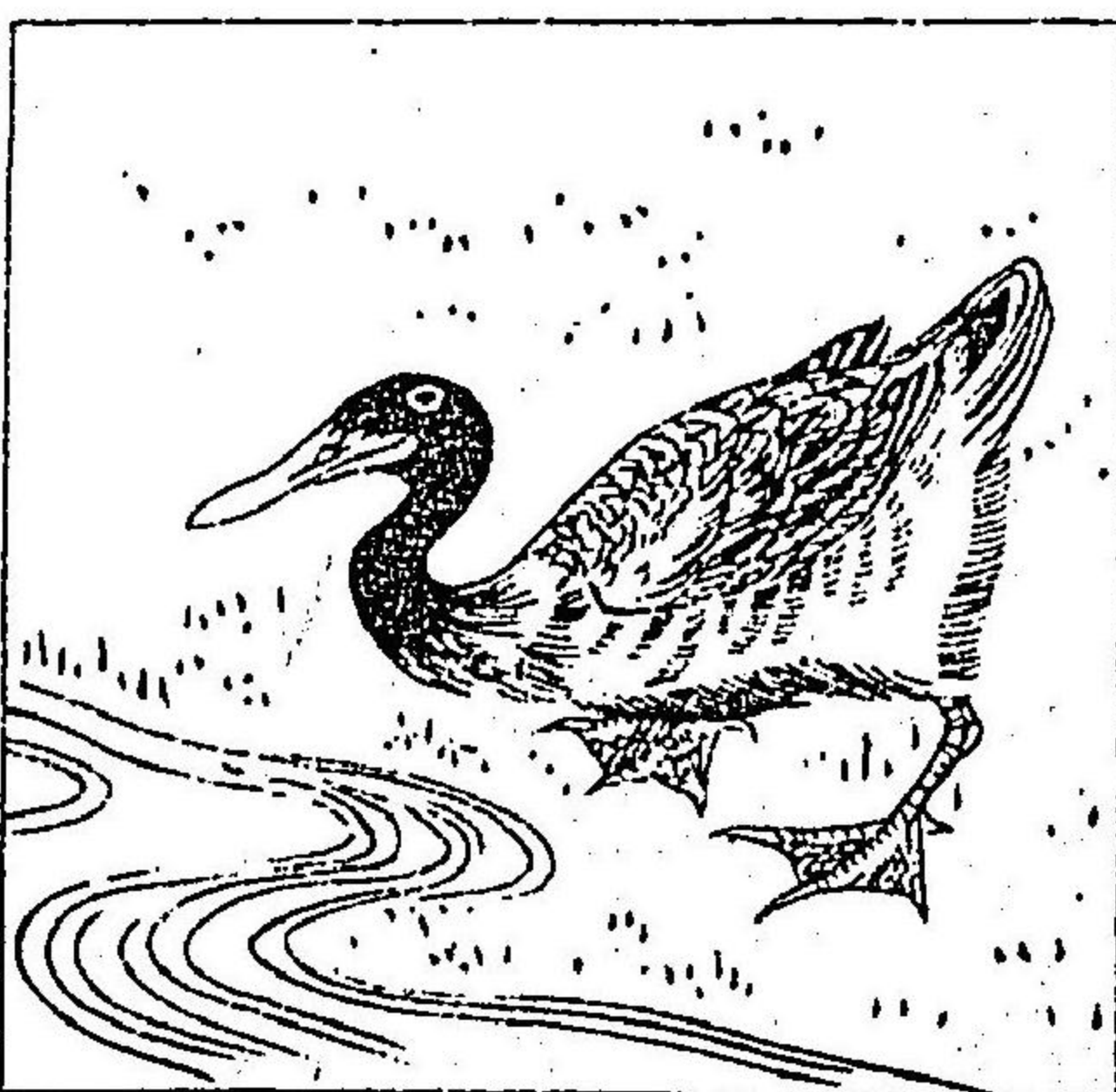
小學讀本卷之二

鞭ムチを持モツてり、男オトコ児コの遊アソビひ、女メ児コと異コトなまきバあり  
老オホさるヒシ牝メ雞ケイ鶩アヒルの子コを、多オホクく伴トモへり○此コノ鶩アヒルの子コハ



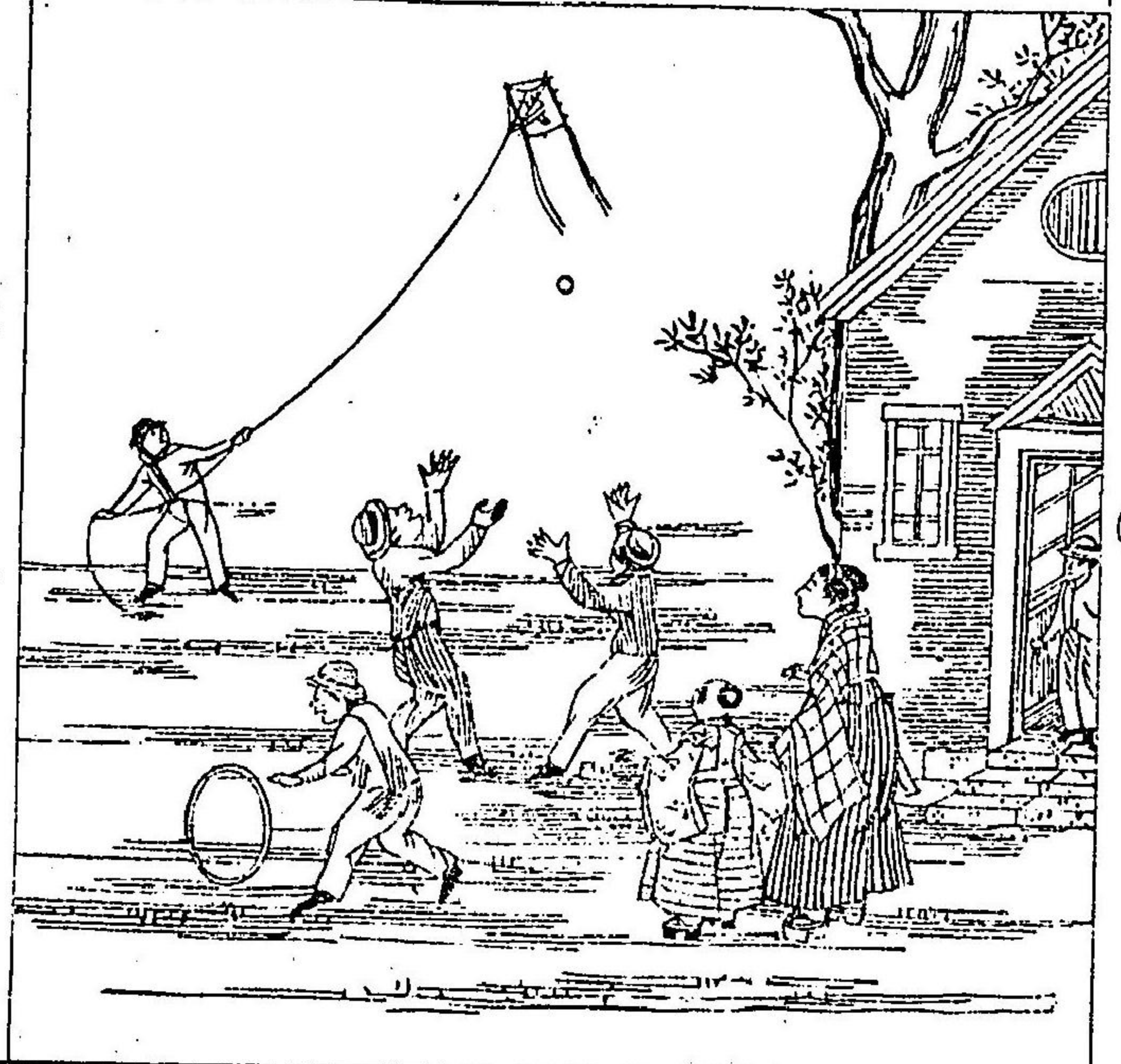
皆ミナ水ミヅの中ナカニ、飛トビ入イり○此コノ鳥トリハ  
其ソノ性セイ、水ミヅ上ウヘニ泳オヨぐことを、好オホシめり  
○牝メ雞ケイハ、其ソノ沉シヅみ溺オホせんことを  
恐オソきて、甚オホク憂ウレひ悲カナシめり○然シカまど  
も、鶩アヒルの子コハ、牝メ雞ケイの心ココロを、量ハカり知チ  
らべして、隨ズ意イニ遊アソべり○牝メ雞ケイ  
ハ、何ナニを憂ウレひ悲カナシむと思オモふや○牝メ雞ケイ  
ハ、此コノ鶩アヒルの游アソ水ミヅ鳥トリなリを、知チら

べして、我ワガ子コと思オモひ、悲カナシめるナリ○  
爰ココニ成セイ長チヨウしとるナリ鶩アヒルなり○鶩アヒルの  
嘴クサシも、牝メ雞ケイの嘴クサシより、大オホくして、其ソノ  
足アシも、蹠シヤキなり、故ナニも、水ミヅも入イりて、能ヨク  
く泳オヨぐことを、得ウケるナリ○  
此コノハ、何ナニ家カあるを、知チりや○これハ、學ガク校コウあるべ



し、數オホク多クの、男オトコ女メの子コ、此コノ家カニ通カヨふを以モツて、知チらセた  
り○汝ニハ、小セウ兒ニの遊アソ歩カ場バニ、出イで、遊アソぶを見ミたり  
ヤ○數オホク多クの、小セウ兒ニ、出イで、走ワシるも、何ナニも、球マリを弄モシぶも  
何ナニも、或アルハ、紙カミ鳶トウを揚アげ、或アルハ、輪ワを廻マわして、遊アソべり

○男兒も、女兒も、學校  
 へ、能く勉強せよ  
 一〇能く勉強しとる、  
 後、非まば、遊歩をや  
 るさるとも、誠よ、樂き  
 こと、まきものあり  
 今此子の釣りとる魚  
 の、鯉あり〇汝も、魚を  
 釣り得るとき、能く心を  
 用ゐよ、釣糸を切ら  
 ること、ゆるべし〇天曇りて、  
 雨少しく降り来



きり〇魚を釣るよ、雨天の  
 ときを、宜しとるる〇然り  
 少しく雨降りて、風おく暖  
 る日を、宜しとる〇汝も、魚を  
 釣るを以て、宜しき事と思ふ  
 〇然り魚を釣りて、食むる  
 の、悪しき事な、何と雖、釣  
 りとる魚を、弄びて、徒よ捨つ

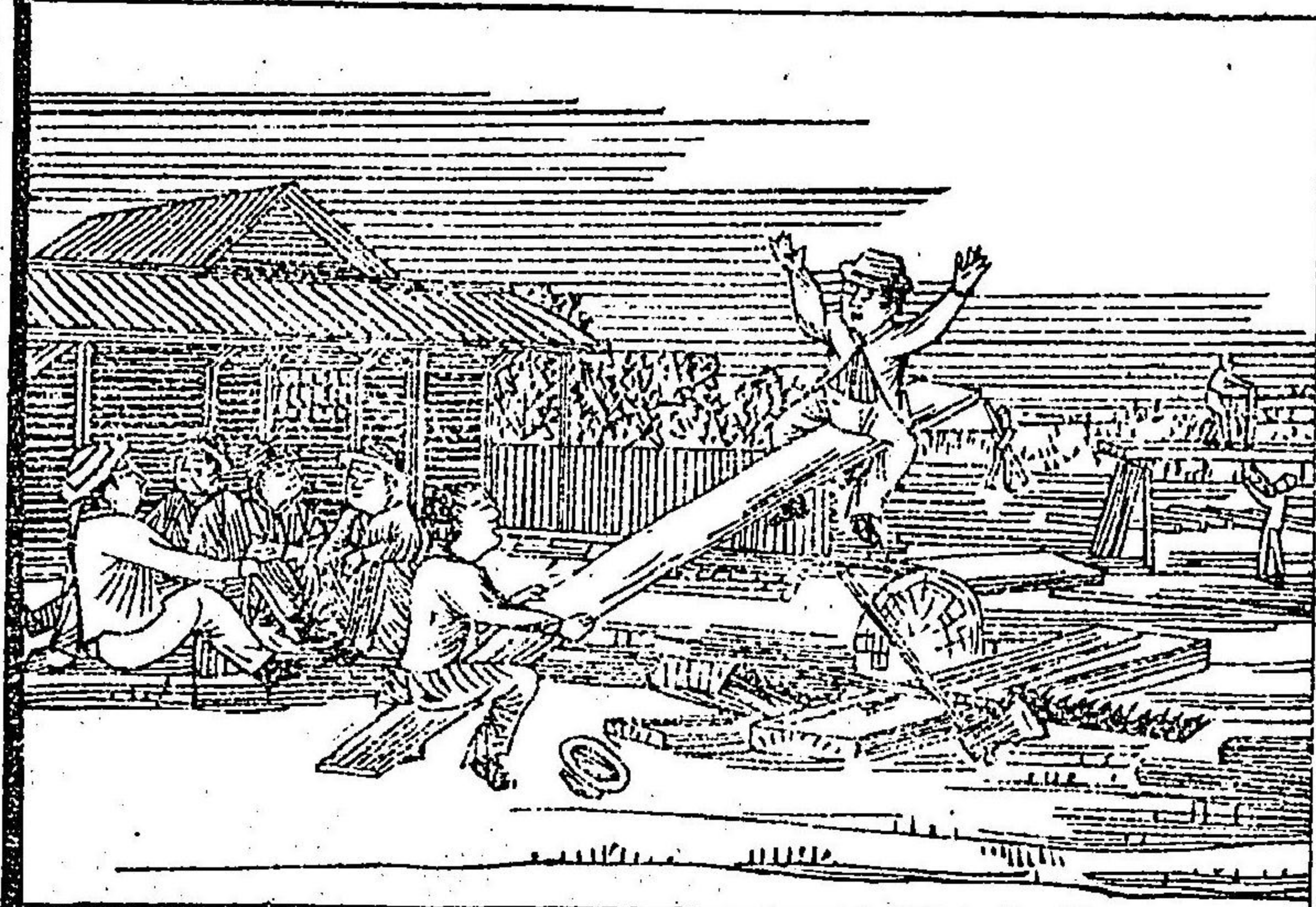
る、宜しとる  
 男兒と、女兒と、何り〇これ、學校へ行く途中

り○今急ぎて、學校へ行かん  
 と、思ふがゆゑ、男児の女児  
 を助けて、走まり○此児等ハ、  
 學校へ行くと、樂と思へりや  
 ○然り、此児等ハ、其性善きも  
 のまきハ、學校へ行きて、學問  
 まることとを、第一の樂と思ふなり  
 此馬ハ、柔和なる馬ゆゑ、二人の小児を、乗せて歩  
 めり○此馬を、走ると、思ふなり○此馬の、前の一足  
 を、擧げて、あとの一足を、下さんとあるを見れば



此處ハ、工人の作事場あり○數多の大人ハ、作事  
 を事とせり○二人の小児ハ、此作事場より、板  
 起るなり、ゆゑ、徐々歩  
 むあり○前の小児ハ、手  
 綱を、両手ニ持ちたまふと  
 も、其見ゆるハ、只右の手  
 のみあり○後の小児ハ、  
 馬より、落つることを、恐  
 る、ゆゑ、前の小児を、  
 抱きて、をきり

又乗りて遊アソブび戯ハムき居イまり一人の小兒コドモハ高く上アがり一人ヒトハ低ヒクく下サがりたり○汝キミハ小兒コドモの傍カタハラ又マタある器ウツを何ナニありと思オモふや○とむハ斧ノコギリと鋸ノコギリあり○汝キミハ此小兒コドモ等を善ヨキき小兒コドモと思オモふ○作事サカシ場バに來キタりて遊アソぶハ善ヨキき小兒コドモ又マタハ何ナニもするべし○今イマハ遊歩イソホをすべき時間ジカンと

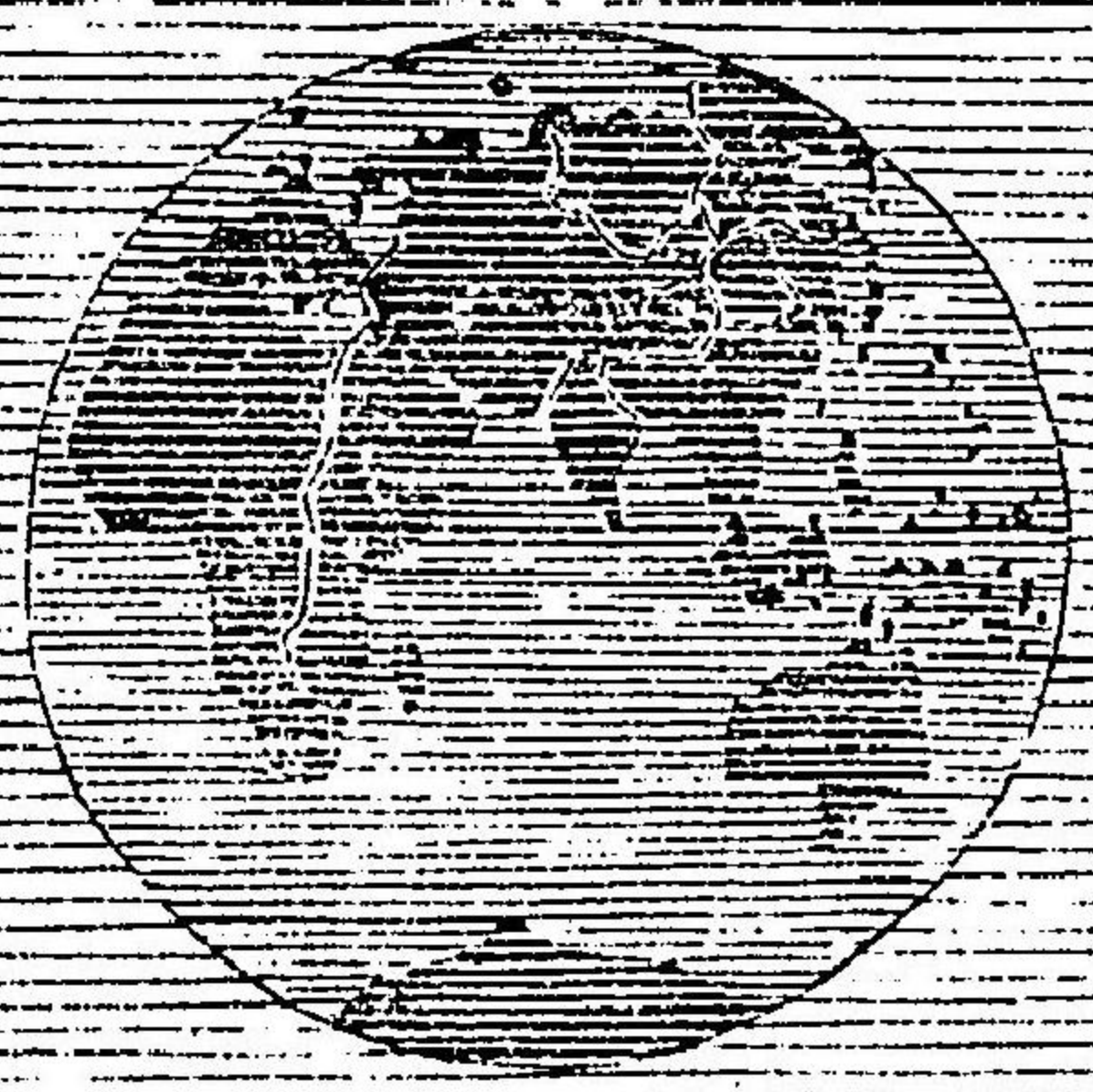


ハ見ミえび學問ガクモンをすべき時間ガンあり○學問ガクモンをすべき時間ガンに、作事サカシ場バ又マタ來キタりて遊アソび戯ハムき作事サカシの妨サマタケをさるハ必カナラシしき小兒コドモなり○汝キミ等タチハ遊歩イソホのときも作事サカシ場バ又マタ來キタるべし○遊歩イソホ場バにて遊アソぶなり」

第二

我等ワラの住居スミする世界セカイハ平ナヒラあるものなり○遊アソび戯ハムき居イまり一人の小兒コドモハ高く上アがり一人ヒトハ低ヒクく下サがりたり○汝キミハ小兒コドモの傍カタハラ又マタある器ウツを何ナニありと思オモふや○とむハ斧ノコギリと鋸ノコギリあり○汝キミハ此小兒コドモ等を善ヨキき小兒コドモと思オモふ○作事サカシ場バに來キタりて遊アソぶハ善ヨキき小兒コドモ又マタハ何ナニもするべし○今イマハ遊歩イソホをすべき時間ジカンと

きものよして、世界又光と、  
 熱とを與ふるものあり  
 ○我等、晝に、太陽を見  
 ども、夜に、見ることなく  
 ○汝、夜の、太陽を見ること  
 とを得ざるに、何ぞも  
 るを、知まじや○夜に、太  
 陽の方を、向をざるも  
 に、見ることを得ざるま  
 り○月も、亦圓きものま



きども、太陽及地球の如く、大あざむ○月、原  
 より、光あきものまきども、太陽の光を受けて、始  
 めて輝くものあり  
 我等一同、草刈場へ、出  
 来きり○小兒に、刈りた  
 る草の上へ、坐し居て草  
 を刈るを觀る○枯草は、  
 柔まる物まきへ、此上り  
 遊び戯るゝ、又宜しきま  
 り○草へ、牛馬の食あり



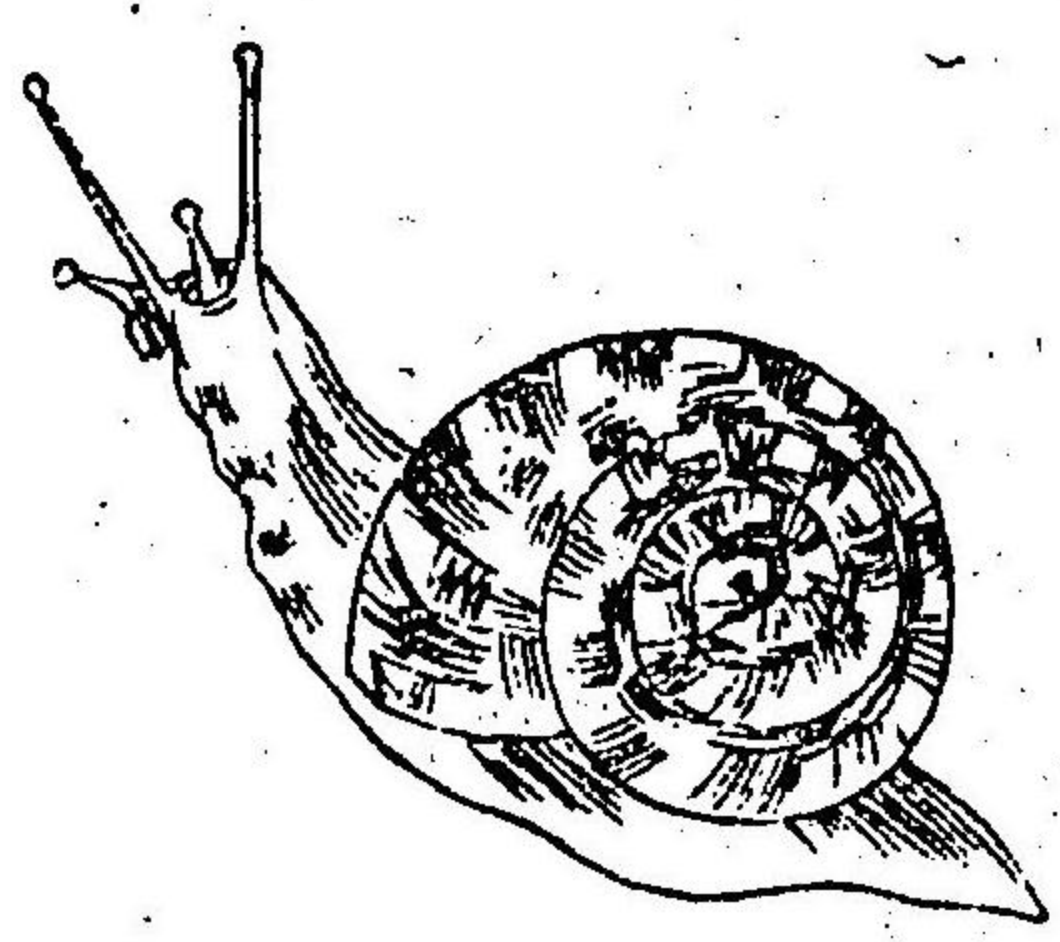
小書讀本 卷二

ゆゑに、牛馬を畜ふ家よて、夏の間に刈りて、  
 きを貯ふ



狐は、犬に似たる獸よりて、  
 頭平に、鼻と耳と、尖りて、  
 尾は甚長し。○此獸は、穴の  
 中より住し、晝は隠きて出で  
 ば、夜に入き、穴より出で  
 て、田畠の傍を遊行は。○狐  
 は、食を貪る獸よりて多く  
 雞の雛を食ひ、又好きて、桑

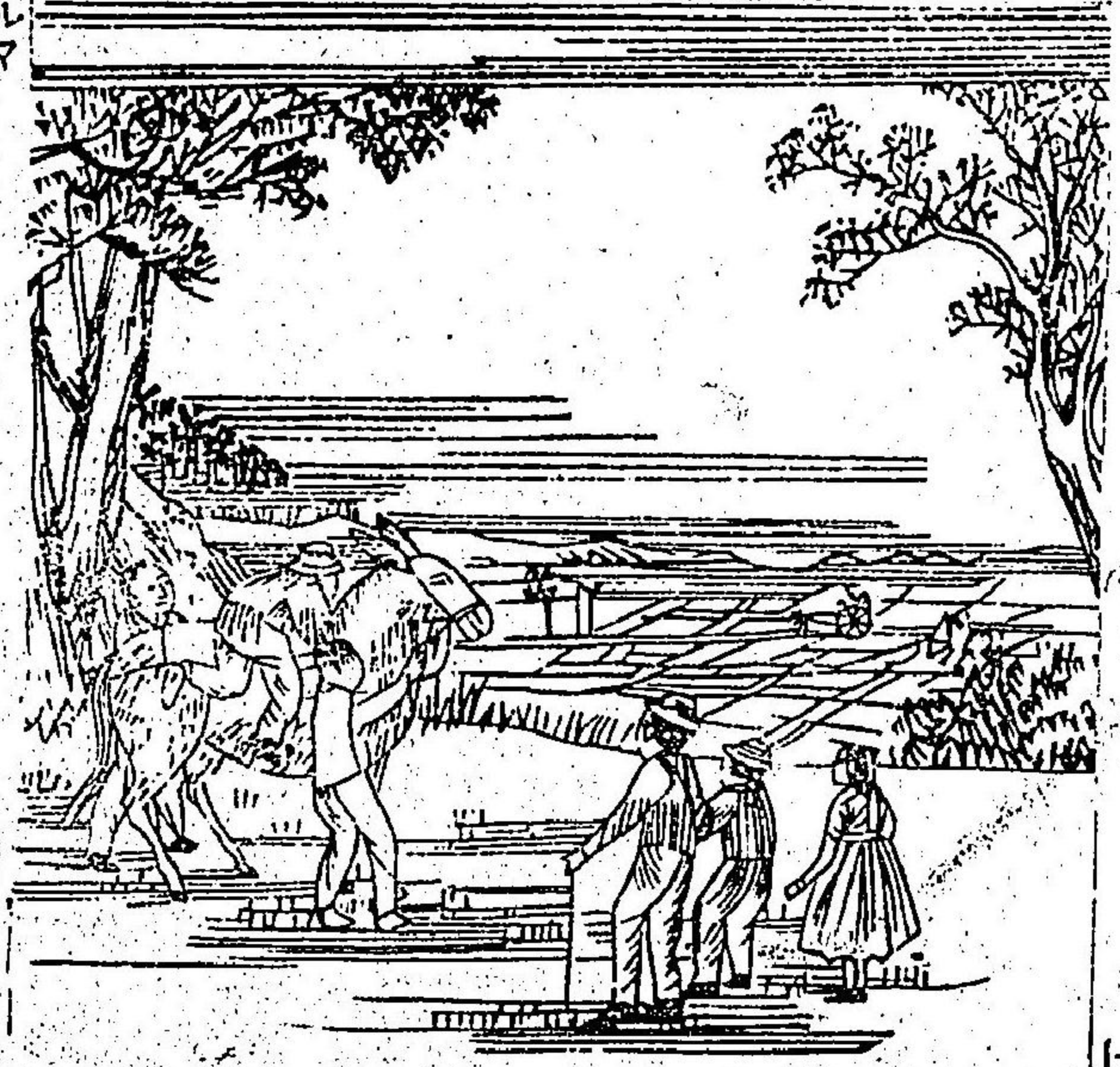
の實櫻の實等を食ふ。○雞を捕ふまば、穴に持ち  
 行きて、こきを食ふ。○もし、犬を見るときは、穴の  
 中より逃げ入りて、出づることあり、是は、穴に入ら  
 ざれば、直に犬に噛み殺さる。○故あり。○  
 蝸牛は、足なきゆゑ、歩むこと能はず、  
 只匍匐するのみあり



この蟲は、背の上より、殻よりて、物  
 へ恐るるときは、其中より縮み入  
 る。○蝸牛の動くときは、四本の  
 角を出さる、其中二本の長き角



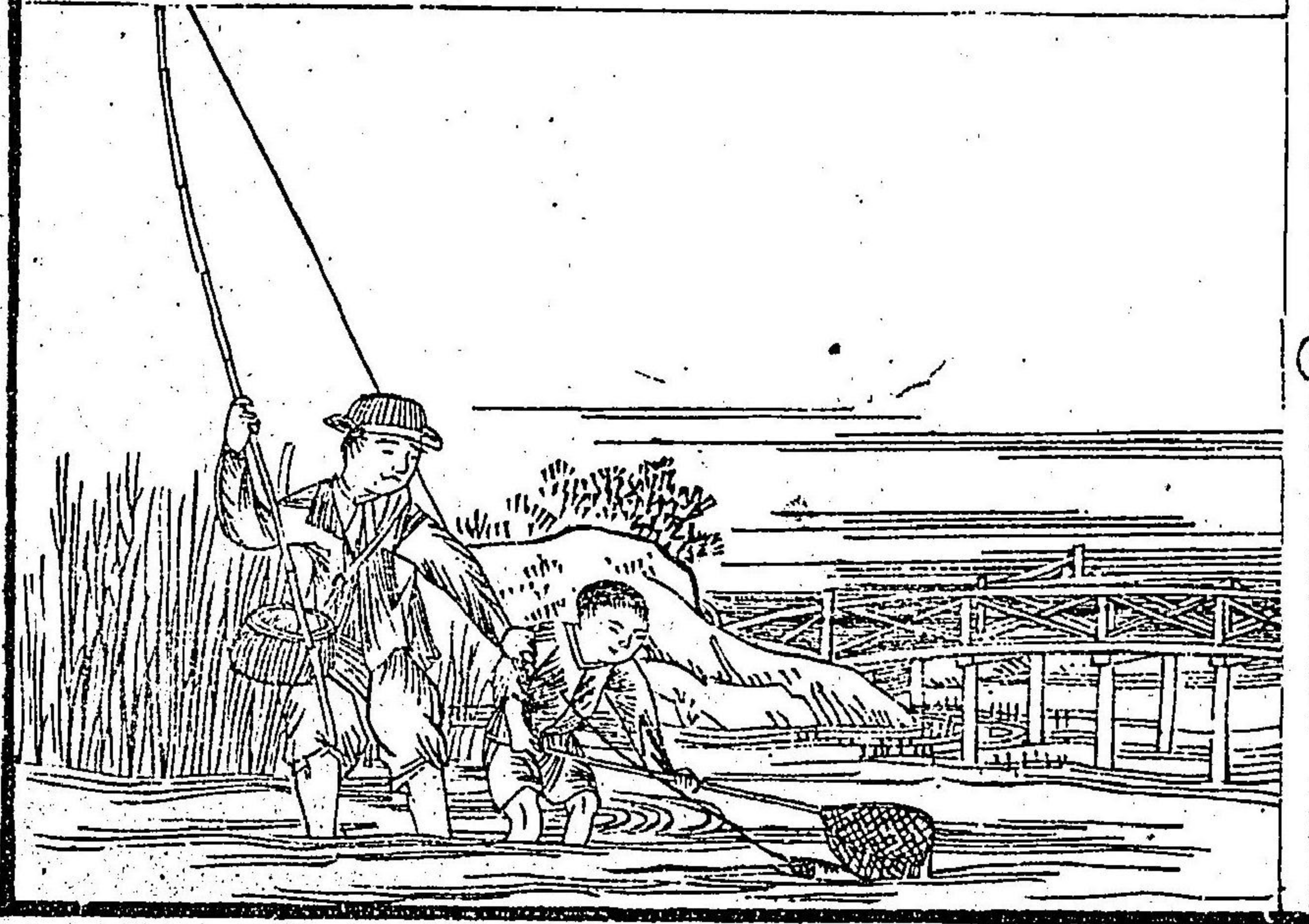
の先、目より短き角の下より口より○此處、冬  
 の、土の中より伏し、春の至るを待ちて出づるあり  
 汝、此處より男兒と女兒  
 と、驢馬の在るを見たり  
 や○男兒は、驢馬に乗ら  
 んとけ○何如、汝を乗  
 り易かるべしと思ふら  
 ○驢馬は、小き馬ふれ  
 ども、小兒より乗り難  
 るべし○遙の向ひは、荷車より○汝は此荷車を



何ありと思ふや○遠き處ゆえ、慥に見分くるこ  
 と、能えざれども、島の小路より、見るを見まば、穀物  
 を載せたる車あるべし

此圖に、画きたるもの、何ありや○大人と小兒  
 と、二人水中より立てり○此等、何をあはしや○此  
 人々の、魚を漁するなり、大人の釣りたる魚は、大  
 まるゆえ、強く曳らば、糸の切きんことを、恐ま  
 て、遠く曳き擧げざるあり○男兒の持ちたるも  
 の、何ありと思ふや○そき、網の類、よて、たま  
 とりよものあり○男兒は、此網を以て、魚を捕つ

んとけ ○大人の脇ワキ懸カ  
 けたるハ、何あるぞ ○と  
 きハ、蓋フタのカ籠カゴハ、其  
 中ハ、魚を入るハあり ○  
 此人の、立ちたる處ハ、深  
 ーと思ふハ ○人の膝ヒザま  
 で、水ハ入らざるを、見  
 ハ、甚ハ深カうハ、もハ深水  
 あり、二人とも、立つと  
 と、能えざるベー ○此河



ー、架カしたる橋ハシハ、汝ハ、此橋ハ、何ナニぞ造ツクりたる  
 と思ふぞ ○橋ハシハ、木キと、石イシと、鐵テツとの別マハ、けきど  
 も、とせハ、木キにて造ツクりたる橋ハシあり、  
 汝ハ、此男兒オトコを、何ナニ歳サイ許カふ  
 りと思ふや ○此男兒ハ、  
 十歳以上あり ○此男兒  
 ハ、善ヨクき人ヒトありと思ふハ  
 ○否イナ學問ガクをせ、又遊アソ  
 歩ホをせ、さびして、休やすみ  
 をする内ウチに、怠オシりものと、



知らるるあり○此男児ハ何又倚りて、何を見る  
 や○此男児の、倚りたるものハ、大なる石の柱を  
 り、又此男児ハ、何をも見、只天をふらむるあり  
 ○總て、小児ハ、勉むべき時ハ、遊ぶべき時  
 も、つり○此小児の如く、常々勉強をなさざると  
 きハ、成長の後、人又勝るとを得ざるあり  
 爰又怠惰の小児ハ、○彼ハ、學校へ行くこと云  
 ひ、何ゆゑ、學校へ行くべし、途中ハ遊  
 び居るヤ○未學校へ行くべき時刻來らばヤ○  
 學校へ行くハ、既ハ誓古始まりたまはば、此小児ハ、と

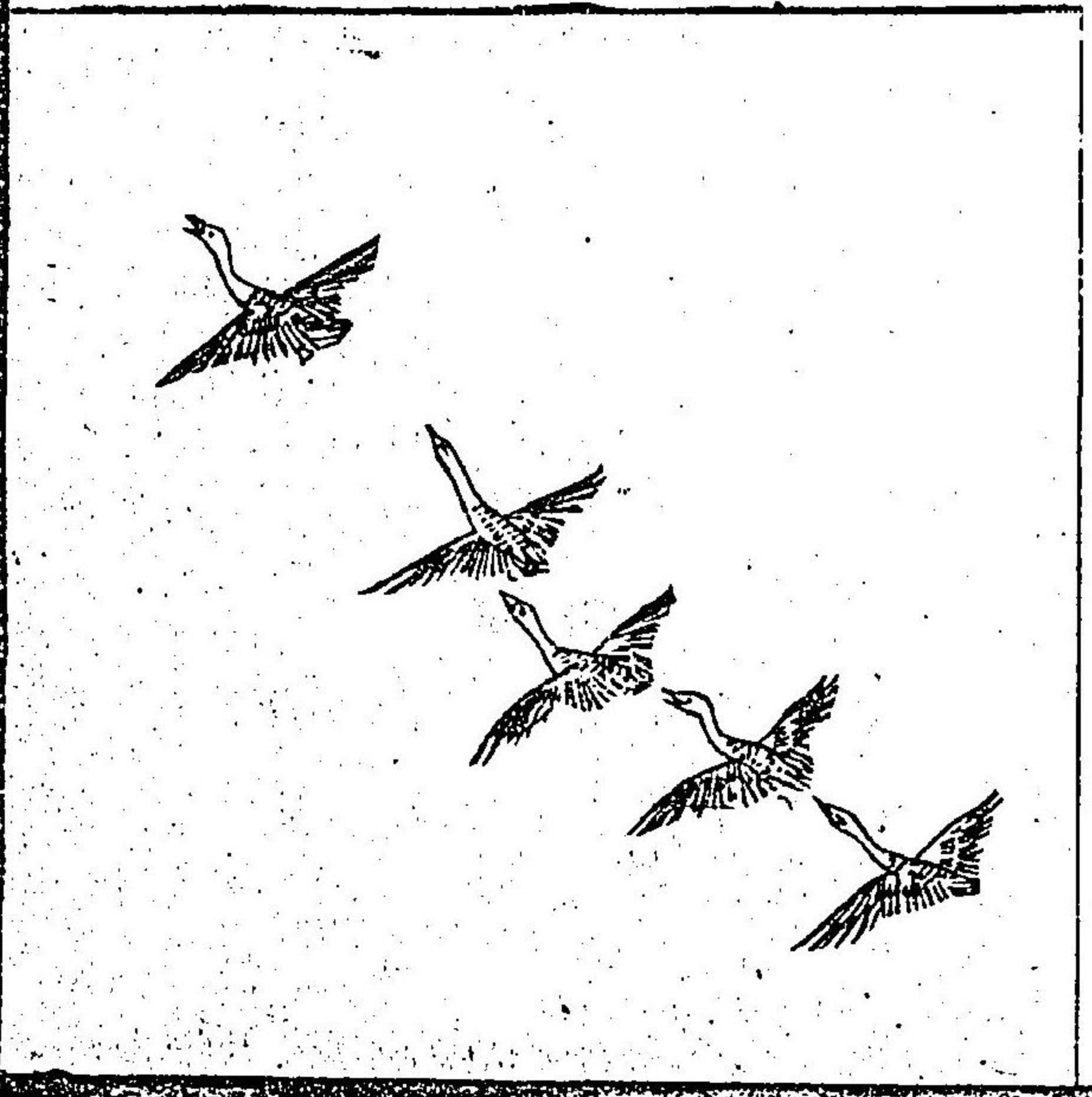
く行くべき時刻あり○然らば、何ゆゑ、爰止ま  
 り居るヤ○彼ハ、犬又乗り、又他の怠りものと、遊  
 びんと、思へばあり○彼ハ  
 學校へ行くものあらば、其  
 書を、何處に置きたるヤ  
 ○書を、自分の家、怠  
 たるあり○さきハ、學校へ  
 行きたりとも、誓古まると  
 とを得ば○善き小児ハ、書  
 を大切とあして、學校へ行



くを好み、替古の時間来きバ、決して、途中まで、遊  
 び居ることなく、學校まで、能く勉強して、學ぶ  
 ゆえ、其等級屢進むあり

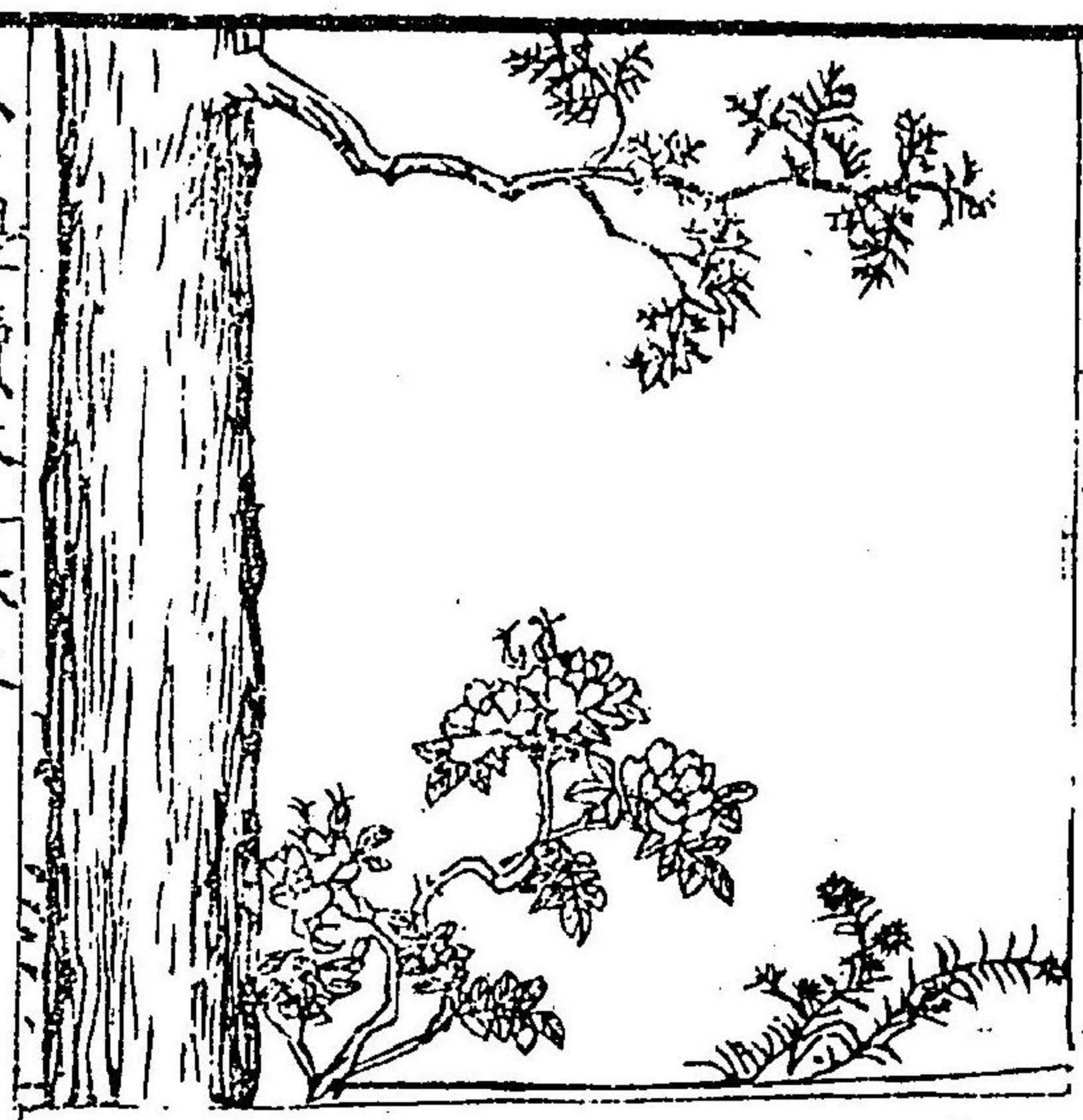
第三

雁の列をふりて、行く圖  
 〇見るべし、一羽の  
 雁導をふせば、其他の雁  
 のときも、隨ひて、飛行  
 を〇是れ、何處も行くや  
 〇或は、水邊も行き、て、葦



の間も、息み、或は、田も下りて、食物を求めんとし  
 るあり、

此鳥は、冬は北より南に來り、春に至きハ、又南よ  
 り北に歸る、故に夏は此地も居ることあり



地も生ひ出づる物も、草と、  
 木と、とりて、木も灌木と、喬  
 木と、とり〇草ハ、其幹葉一  
 年限りて、枯るもの、  
 權木ハ、高一丈も出で、  
 と、雖其幹ハ、枯きざるもの

あり○喬木とい、成長して、高大に至るものを云ふ○此三の者を合せて、植物と云ふ、植物の生を保ちて、能く成長し、又死して、枯朽するものなきども、人の如く、物を思え、根、食物を、地下より吸ひ、葉に能く呼吸せ、れども、鳥獸の如く、動く



ことふ」

鳥は、二つの足と、二つの翼ありて、多くの空中に翔る、又水上に住むものも有り○獸類は、四足にして、膚は、長き毛

り○此鳥と獸とい、身體を、意に従ひて、動くせとも、人の如く、言ふことと能く、汝は、實の草木の種類を、きりや○其莢を見て、豌豆と、蠶豆とを、知り、穂の形を見て、稻と、麥とを知るべし

草木とい、皆種子あり、豌豆、蠶豆は、莢の中、在りて、梨、李、橙は、肉の中、在り○種子の食物とあるもの、稻、麥、豆、黍、粟の類あり、肉の食



物とあるその梅桃梨李蜜柑の類あり

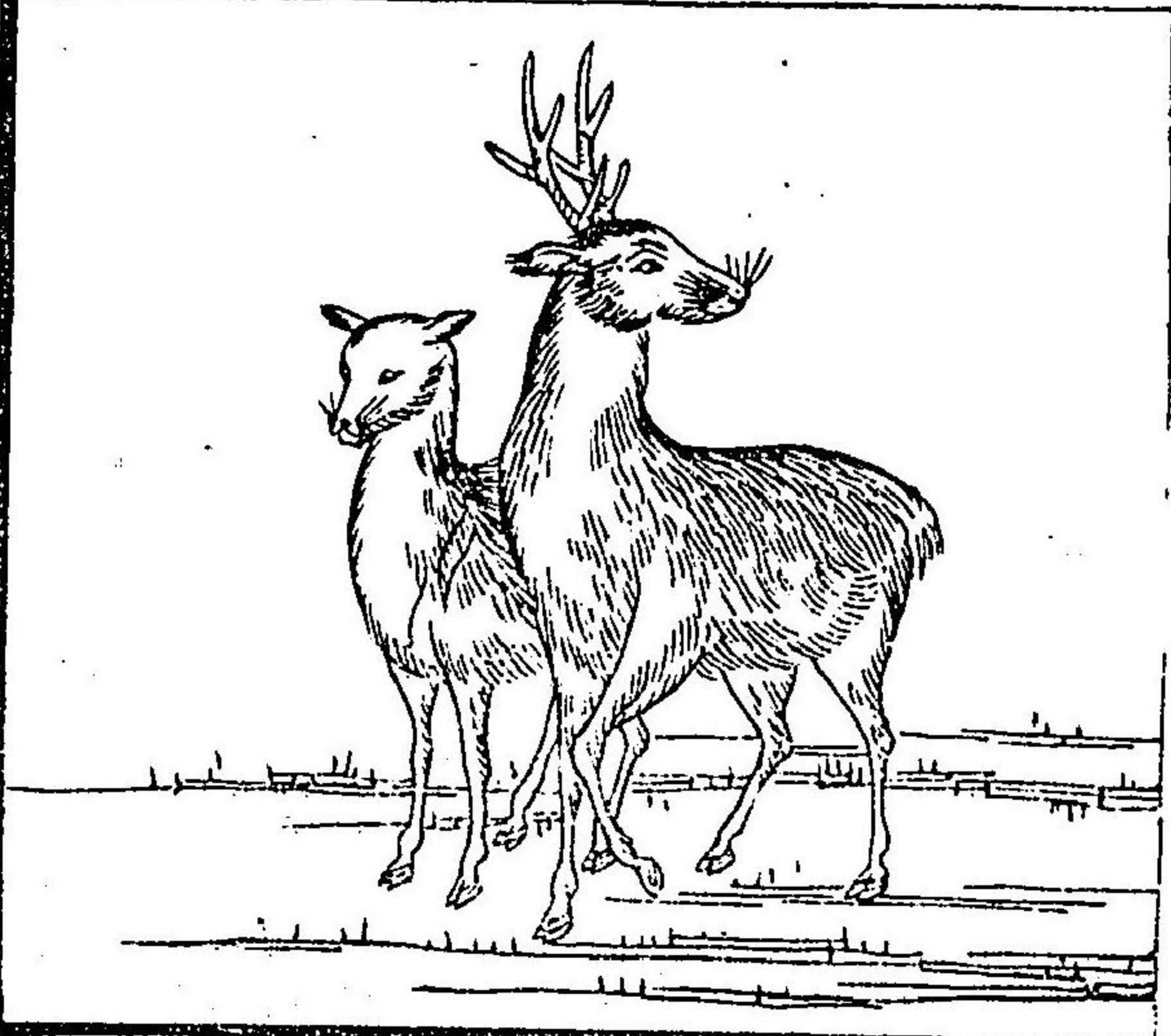
草木の皆種子より生じ、濕ひたる土の中は種子を置くとき、漸く膨脹して、遂に破裂し、其所より芽と根とを生じざるあり

鹿は山林に住する獸あり

この獸の牡は枝を生じたる角あり、牝は角あり

其色の茶褐色にして、白き斑あり

鹿は長き足ありて、走ると



と、甚速あり。○常は草木の葉を食とし、或は田野

より来て、穀物を食することあり、此獸の角は堅くして、器を造るべく、又其皮は席とふべし

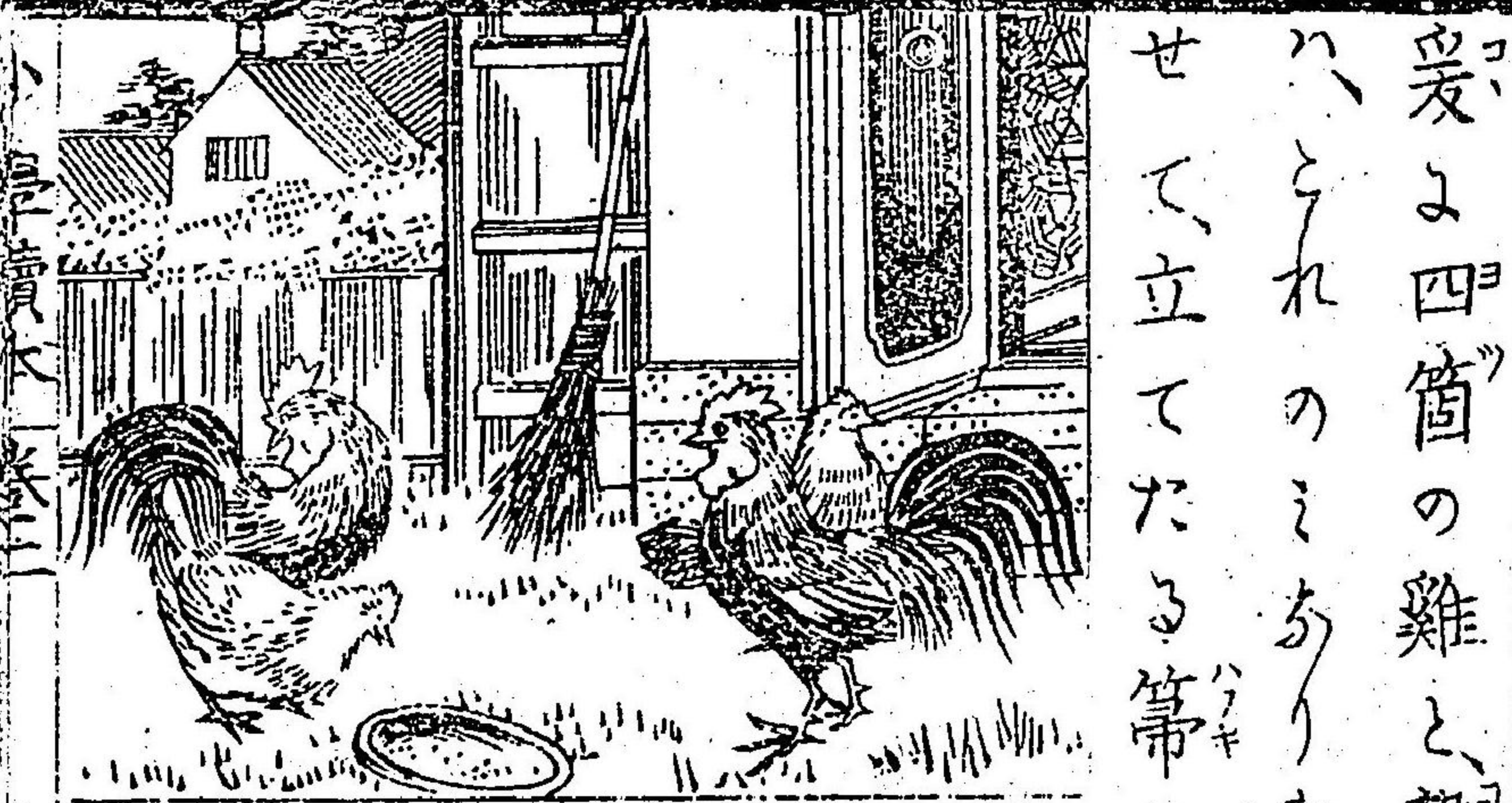
此男兒は、惡しき心のものであり、汝はこの男兒の持てる、帽の中に、ある物を見たる。○これ、柿

の實あり。○此柿の實を、垣を踰えて、隣家より盗と取り、今此男兒柿の實を、盗と取り、垣

を踰えて、出でんとする所を、數多の犬ども、これを見て、男兒を追ひ、一匹の犬、男兒の裾を咬

つたり、よりて、男兒の垣と踰え去ることを得ば

此時盜まらる。杓の實と捨  
 てみべ犬の裾を放つべけ  
 きども、此男兒の、これを捨  
 つること能えぬ。○他人の  
 物を盗むは、決して、為す  
 べきことなり、善き小兒は、自  
 分の物より、けりざれば、  
 取るとあり。○常々、行状の、正  
 しく、きもの、幸多  
 く、正しう、ぎるもの、幸を  
 得ること、能えざま  
 ば、汝等、他人のものと見て、  
 何如ふるものありと  
 必これを得んことを、欲  
 すること、あかき



爰は四箇の雞と、穀倉とあり。○汝が見る所  
 あり、これの、ありや。○否、家の後、松あり、垣あり、寄  
 せて、立てたる、簾あり、雞の飲水を入きたる、水鉢  
 あり。○汝は、此鉢は、水ありと  
 思ふや。○必水あるあるべし、  
 ○何を以て、水の、あると、知  
 る。○此鉢は、少し傾きて、一  
 邊の縁高く出でたるを以て、水  
 の、あると、知き、水の傾きた  
 る鉢の中より、決して、斜

傾くことおく、其表面へ、必イチヤク一様よ、平ふるものふ  
り○汝ハ雞の水を飲むと見一や、雞ハ牛馬の如ゴト  
く、首を下げて、飲むこと能イもぐ、ゆゑよ一滴口よ  
入イきば、首を擧げて、咽ノド又飲み下シごさるる

此處へ、何知ある所ありや○此處へ、穀倉の傍カタラふ  
るべし、雞ハ、巢スに上カらんと  
して、梯子ハシを傳ツクひ行くあり  
○梯子ハシに、横木ヨコギあり、こまの  
何ナニありや、此横木ハ、梯子ハシの  
級クワあり、



汝ハ雞の巢スと見たるか○巢スハ、隠カクまて、檐エダの裏ウラよ  
ろるゆゑ、見ミることを得エべ  
汝、此處よ来キタき汝、昨日、失ウシひたる所トコロの書籍シヨウシヤクを、尋シね  
得エたりや○否イナ未イ尋シね得エべ○汝ハ、文庫ブンコの中ナカを、搜サグ  
し見ミむや○幾度イツドも、搜サグし見ミたきども、其處ココより  
能イべ○汝今一度イツド尋シね見ミよ、書籍シヨウシヤクふけきば、學マナぶこと  
能イもぐ  
又、汝よ、筆フデありや○筆フデハ、命イぜよきたる如く、文庫  
の上ウヘよ、置オきたり○汝ハ、筆フデの用トクありたを、知チきり  
や○否イナ未イ用トクありたを、知チらば○汝、今其筆フデを取トリ来キ



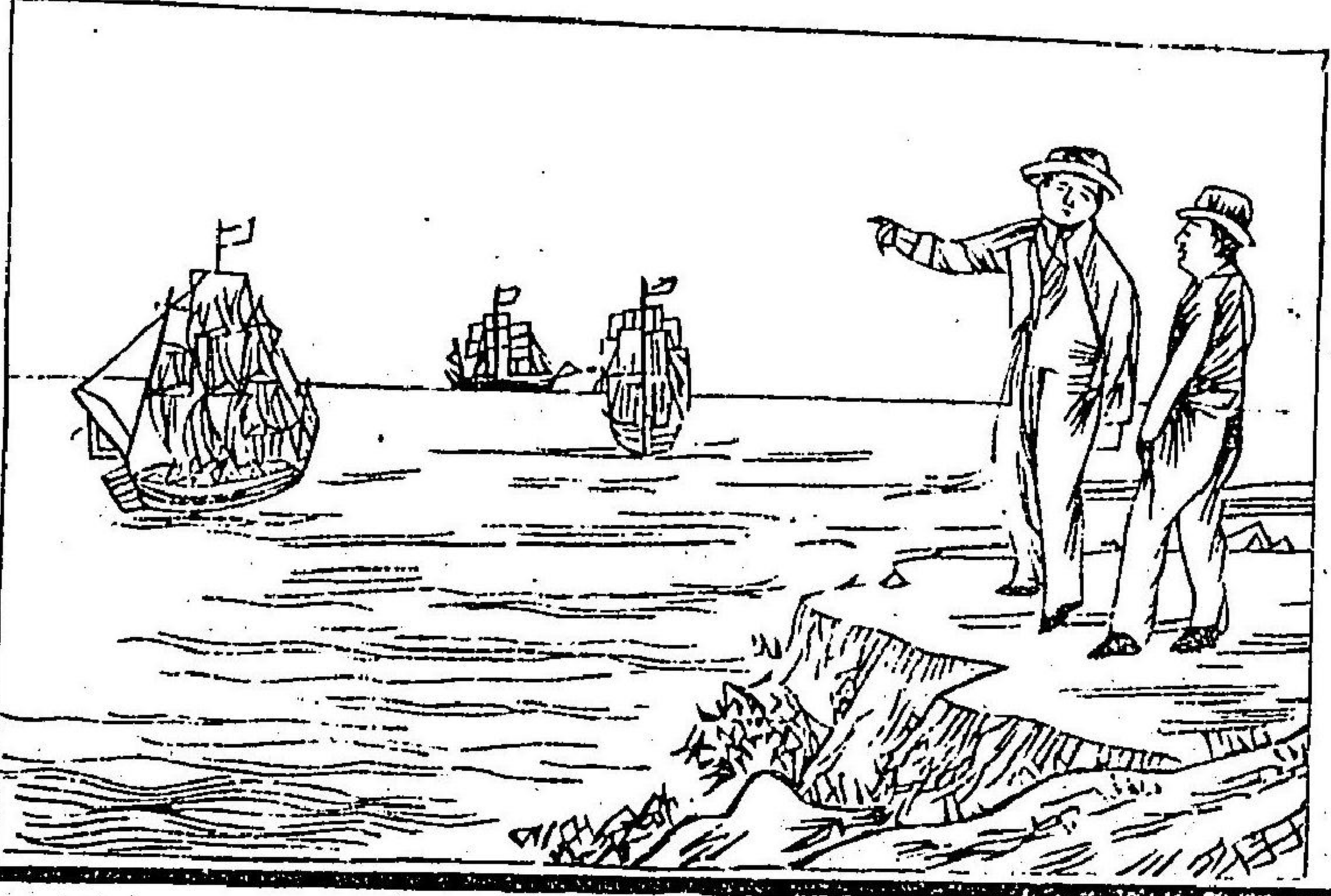
き、汝の筆の用か方と、教ふべし、筆の用かたを  
 知らざれば、字を習ふこと能はず  
 汝へ、今日、學校へ行きたりや  
 ○學校へ行き、終日學びて、先  
 刺歸り来きり○然らば座  
 就きて、復讀せよ、凡て學びた  
 る所とば、常々復讀して、決  
 て忘るべからずべし

第四

岸の上へ、二人の少年ありて、三艘の船の岸に着



くと見居きり○三艘共、帆と十分張り、櫓  
 の上へ、旗を揚げたる、船を  
 一人の少年云ふ、我が朋友  
 へ、去年、先の船に乗じて、外  
 國へ往きたりしが、日を數  
 ふまば、其出立せし日より、  
 今日まで、殆一年及びて、  
 歸り来きり  
 彼の両親も、日々彼の歸る



を待てり○今日無事ある顔を見ることが得て、  
 何許の喜ばしうん、また彼男も、父母の恙なき  
 顔を見れば、定めて大に喜ぶべし  
 彼船は堅固なる船にて、風雨に逢ふとも、破損な  
 く、無難に歸り来まば、船中の人々の皆此船を忝  
 く思ふあるべし  
 人々の外國に往く、學問或は貿易を志して、我  
 國の利益をかさんことと欲するがゆゑあり  
 總て鳥の嘴の長きものと短きものとあり○此  
 嘴にて食物を啄む○鳥の穀物を食するもの

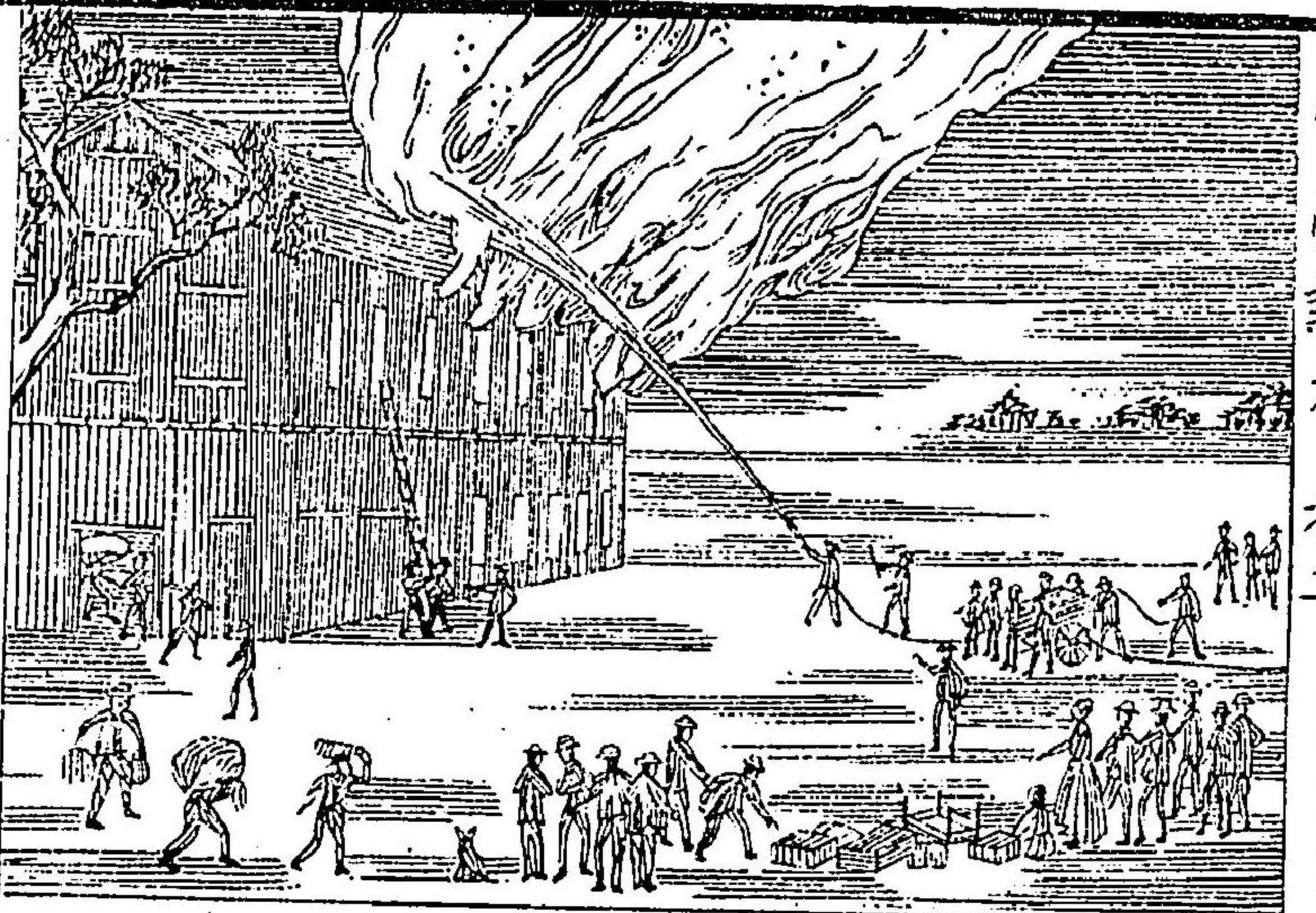


指の後より然れども、啄木鳥類も前後各二指  
 ありて、能く大木に上下し、樹皮の中、住む蟲を  
 搜し食す  
 と、魚又ハ、蟲を食するものと  
 あり○鳥の目の面の兩側より  
 ゆるゆる、一時は、兩方を見る  
 ことを得るあり○林中に遊  
 ぶ鳥と、林禽とつひ、水上に遊  
 ぶ鳥と、水禽とつひ○鳥の足  
 より、四指ありて、三指は前、一

此人の驚きたる風情なり、是は何故ありや。○何故ふることを知らば、○此人久しき以前、遠方より行きて、今我郷に歸り來るに、昔住みし一家の變りたるを見て、驚けるあり。さて此家の、斯く變りたる所以を、話し聞かば、ト此人の家を出でたる後、近隣より一人の小兒あり。

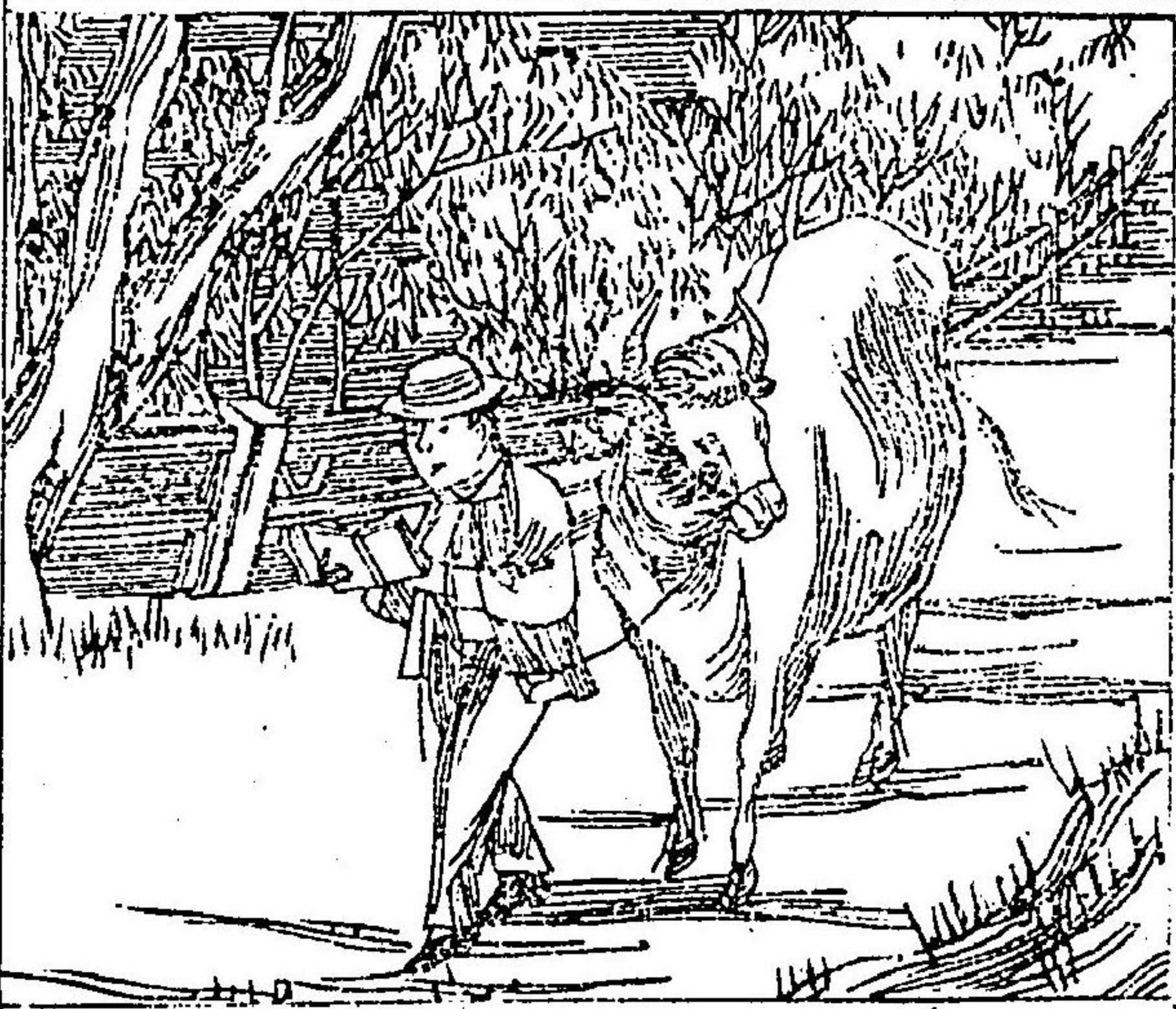


一が、此小兒の、至りて惡しきものにて、ある日、戯ふ、紙を焼きて、遊べる、其火、忽家の障子に燃えつき、終に此家まで、焼け失せたり。○さき、今此人我家に歸り來りても、未妻子の行きたる所とも、知ること能はず、ゆゑに悲み歎くあり。今此人の家の、焼けたる時の状を、圖して示さん。○火と、烟との家の窓より、吹出づる所を見よ。○又、家懸けたる、梯子より、○梯子を上げて、火と消さんと、さる人より、○多くの人を、唧筒にて、頻々、水と注げし。



此圖又画きたるは、柔和なる牛よして、此小兒

然きども、火猶消えばして  
 家終に焼け落ちたるゆゑ、  
 この家の人々も、皆逃げ去  
 きたるあり  
 さきば、小兒の火を弄ぶべ  
 うづら、一度過つ時、家と  
 も、倉をも失ひ、甚しきに至  
 りて、其身をも失ふこと、  
 ありものあり



隨ひ、徐に歩めり、此小兒の、今牧場、牛と曳き行  
 く所あり、○此小兒の、何ゆゑも、歩みあがり、書を  
 讀むや、此小兒の、其性極めて賢く、常に學問を

とと好み、家貧しき  
 ゆゑ、學校に入ることを能  
 ざりて、日々、牧場を行く  
 あり、然きども、學問の志、深  
 きに因りて、道を行く間も、  
 書を讀むあり、又牧場に至  
 りても、休む間、書を見ざ

ることふし、○此の如き小兒へ、他日、必入よまきりて、貴き人とあべー  
 惡しき小兒へ、日々學校へ行くと雖、能く勉強せざりて、遊ぶことのくそ、好むゆる後よ、愚ある者とありて、貧賤よ其身を終るべし」  
 雲雀巢を麥畠の間よ、造りて、雛を育てたり、○麥へ、己よ熟して、刈るべき時よ至りたるよ、雛へ、自由よ、飛ぶこと能え、一日、親鳥食を求めんとて、飛び去り、暮よ及びて、歸り来きば、雛告げて今日、此畠主ある農夫、其子と共に来りて、明日ハ、近

隣の人を雇ひて、此麥を刈り取らんとして、歸きりと云ふ、親鳥聞きて、彼近隣の人を雇はんとならば、未急よ、刈取るべし  
 ば、明日ハ、此處よりとも、恐るよ、又足らばといひ、其翌日ハ、亦食を求めんとて、飛び去りたり  
 かくて、日の暮るよ、比、親鳥歸り来きば、雛又告げて、今日ハ、農夫、其子と共に来りて、近隣の人ハ、同ト



く、己オレが作りたる、麥アヲを刈刈るに、暇イダシならざれば明日  
ハ、朋友トモ親族オトナと頼タカみて刈刈り取トらんとて、歸カヘきりと  
云イハふ、親鳥オトナハ、彼カレ尚ナホ他人トナリと頼タカむの、心ココロならば明日アスも、  
憂ウレふるよ足タラらばと、云イハへり

さて其翌日親鳥例の如く、飛去りて歸り来るよ、  
雛コの云イハふ、今日コンニチハ、農夫ノウブ父子フシ来りて、かく麥アヲの熟ジュクせ  
るうへハ、最早モトメ他人トナリの力チカラを、待マつよ暇イダシならば、明日アス  
ハ、自刈り取るべしとて、歸カヘきりと云イハへり

親鳥ハ、ときを聞キきて、然シカらば我等ワレラも、疾ハヤく此處ココを  
立ち去るべし、農夫ノウブが自刈り取らんと、決キしたる

うへハ必日カナラシと延ヒびならばと、いへりともぞ、  
親鳥の言コト、實ジツと理リなり、他人トナリに依ヨりて、事コトを成ナさん  
とままる者モノハ、恐オソるよ足タらざれども、自ミヅ為カフさんと  
決ケツまる時トキハ、須臾シユウも、猶イウ豫ヨせざる、べけきバあり、さ  
きバ人々ヒト々皆みな自ミヅ為カフさんことと志ココロして、他人トナリの力チカラを  
頼タカむべしと云イハへり

第五

今イマ、花園クワエン又マタ、善ヨき種子タネと、蒔マきて、善ヨき植物シヤクと生シヤクぜし  
め、美ウツクしき花ハナと、開ヒラけしめんとままるに、園中エンチュウ又マタ、蔓ハヒま  
る雜草ザツサウと、抜ヌき取トらざるときハ、蒔マきたる種子タネと

害して生長するごと、能えざらむ

今、此處に花園の雑草を、抜き去る圖を、出だして

以て、これを示さん

地、いもとよきものあきど

も、善き種子を、蒔らざれば、

よき植物を生じ、美しき花

と、開くこと能え、又芽既

に萌出でたるとき、能く

培養せざれば、生長はること

と能え、雑草はときよ反

して、種子を蒔らざきども、自生長し、ときと抜き

去らざれば、大に蔓りて、善き植物を害し、終よこ

きと、枯らし盡し、至るべし

人の心、もと善きものあきども、善き教を聞き

て、これに従えざれば、善き人と成り難し、教師の

教、即我心、種子を蒔くよ同し、故に心を用心

て、これと育ひ、能く成長せしむべし、然きども、不

正の心の生じ易きこと、雑草の如くあき、心よ

蒔きたる、善き種子と、害をすべきもの、勉めてこ



ま去ることと怠りて成長せしむるときは、終  
ハ中<sup>チカ</sup>は萌<sup>キザ</sup>せる良心を害して、ときを枯<sup>カ</sup>ら<sup>ツク</sup>し盡<sup>ツク</sup>け  
よ、至<sup>イタ</sup>るへい

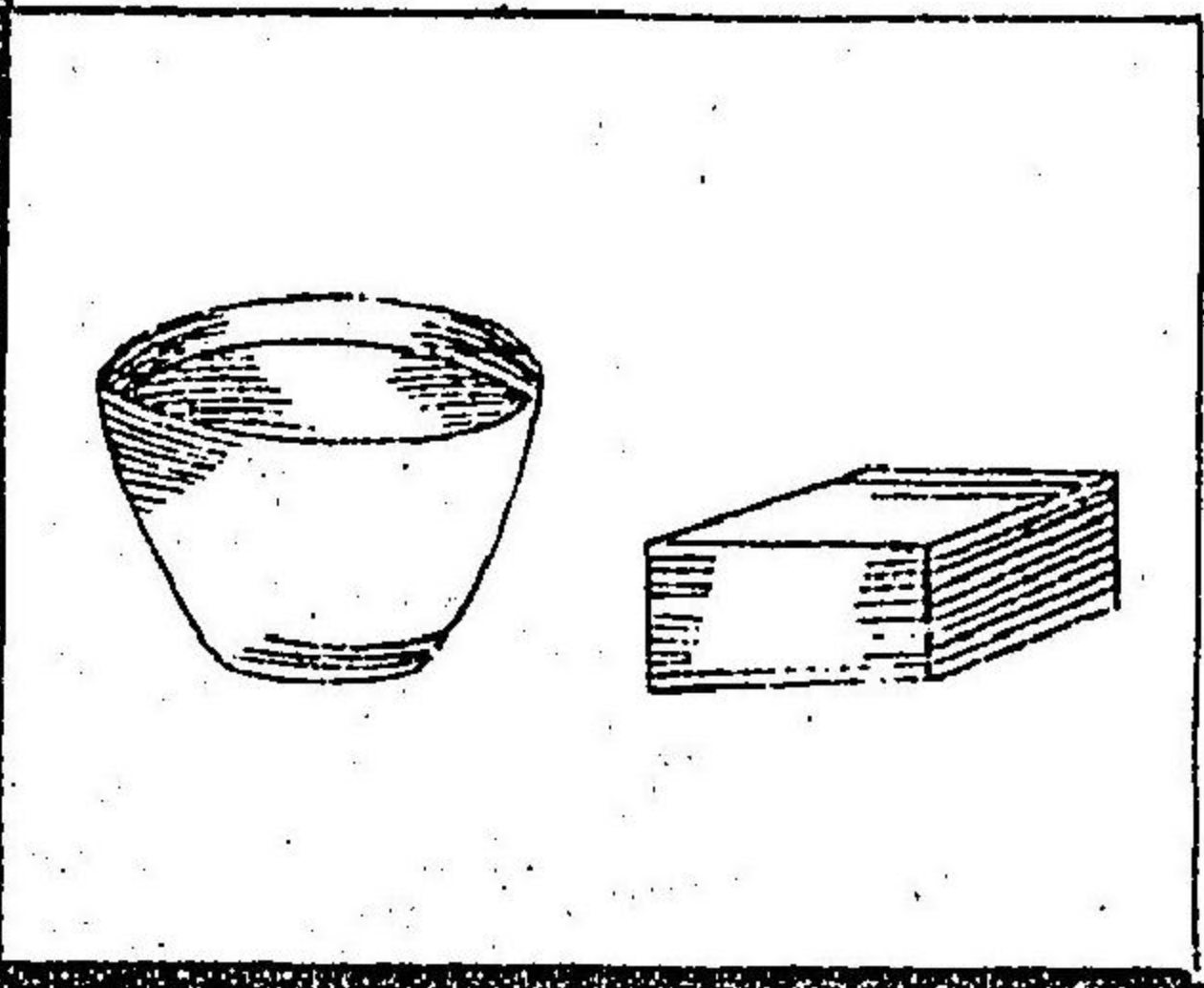
汝等、善き人とあふんことを欲<sup>ホツ</sup>せば、此人の、雑草  
を抜<sup>ヌ</sup>き去<sup>サ</sup>るが如く、勉<sup>ツト</sup>めて不正の心を、抜<sup>ヌ</sup>き去<sup>サ</sup>る

爰<sup>コノ</sup>も、圓<sup>マロ</sup>き器<sup>ウツバ</sup>と、四角<sup>シカク</sup>ある器<sup>ウツバ</sup>とよ、入

きたる水<sup>ミヅ</sup>あり、丸<sup>マル</sup>と水<sup>ミヅ</sup>ハ、同<sup>ドウ</sup>トけき

ども、其器<sup>カタク</sup>の形<sup>カタチ</sup>よ由<sup>ユ</sup>りて、或<sup>アルハ</sup>圓<sup>マロ</sup>く、或

四角<sup>シカク</sup>ある、形<sup>カタチ</sup>とあきり



人も、小児の時ハ、此水の如<sup>コト</sup>ト善<sup>ヨシ</sup>き友<sup>トモ</sup>よ交<sup>マシ</sup>りて、善  
きことと見聞<sup>ミコト</sup>けが、善<sup>ヨシ</sup>き人とあ<sup>ア</sup>り、又<sup>マタ</sup>惡<sup>アク</sup>き友<sup>トモ</sup>よ  
交<sup>マシ</sup>りて、惡<sup>アク</sup>きことと見聞<sup>ミコト</sup>けが、惡<sup>アク</sup>き人と

あるあり、

家の内外<sup>ウチソト</sup>よ、數<sup>アツク</sup>多<sup>タク</sup>の小<sup>コ</sup>兒<sup>ニ</sup>あり、  
て、其遊<sup>アソビ</sup>ぶ<sup>コト</sup>の各<sup>オノ</sup>異<sup>イコト</sup>あるを  
見<sup>ミ</sup>るべし、家の内<sup>ウチ</sup>ある小<sup>コ</sup>兒<sup>ニ</sup>ハ、  
日々學校<sup>ガク</sup>よて、學<sup>マナ</sup>びたる所<sup>トコロ</sup>を、  
家<sup>ウチ</sup>よ歸<sup>カエ</sup>りて、其友<sup>トモ</sup>と互<sup>互ニ</sup>問<sup>モン</sup>答<sup>ダ</sup>す  
して、ときを樂<sup>タノシミ</sup>とし、此等<sup>コノトウ</sup>ハ他

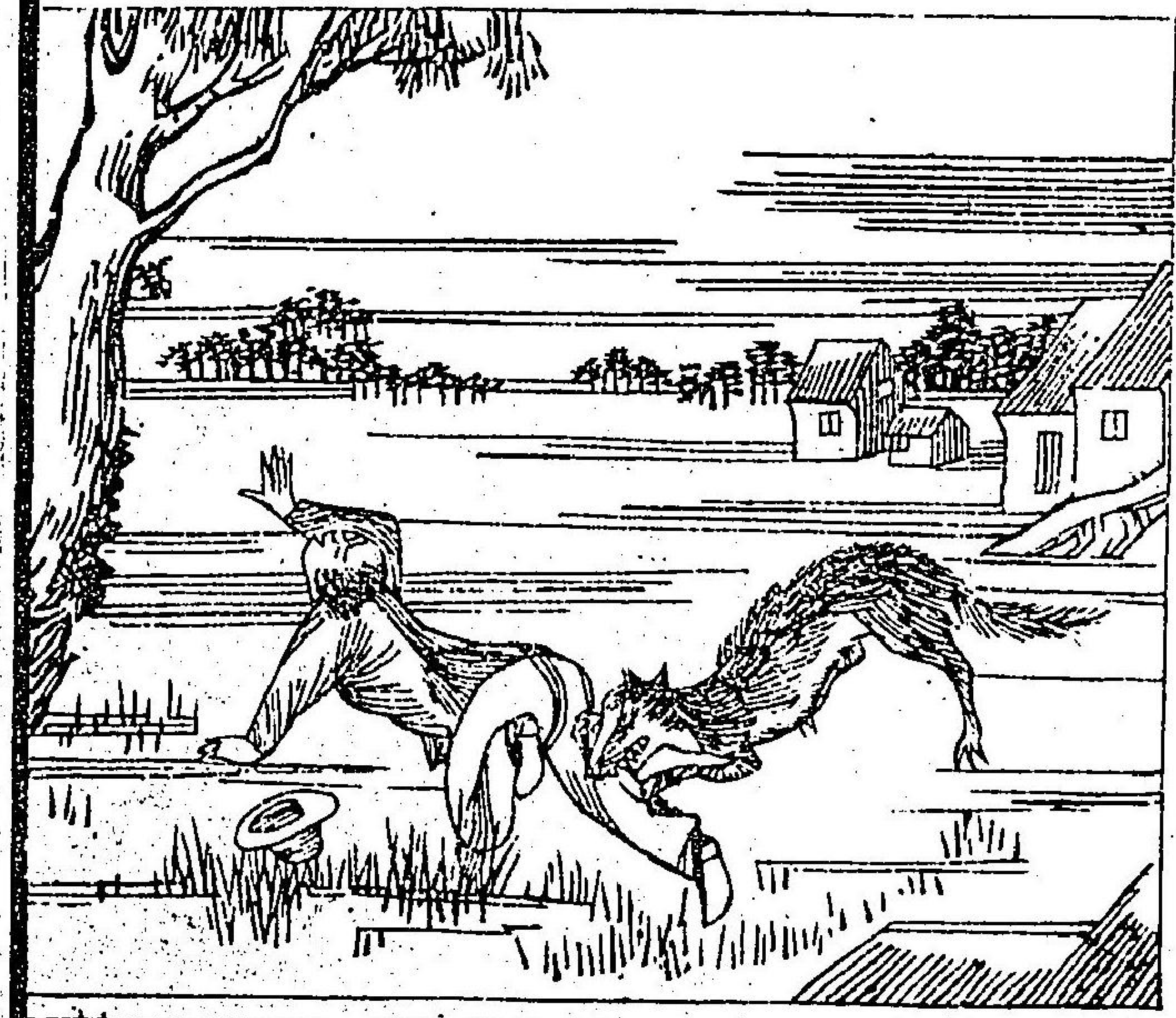




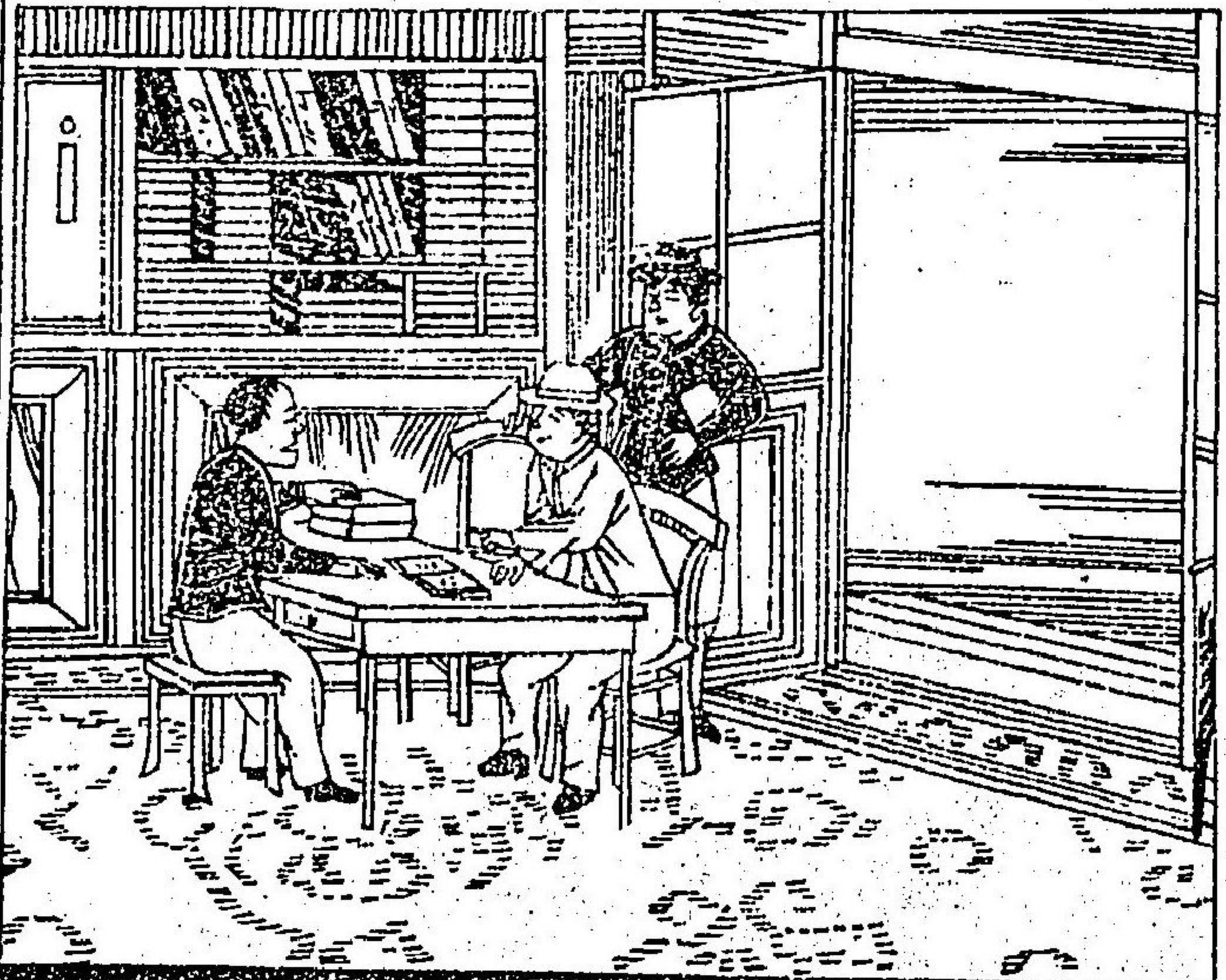
日、必賢き人と、ふるべし、又、外に集まり遊べる小  
児に、學校にも、行らざる者と見えて、犬を噛む合  
せ、棒と打揮り、無益の遊のくとおせり、此等以後  
日、必愚あるものとふるべし、汝等賢き人とあ  
んと思ふ、能く心を用ゐて、常に善き友と交り  
必、惡しき小兒等と遊ぶべし、  
汝等事の正しきと知るとき、たとひ他  
日、利あることと、思ふとも、決して、行ふべし、  
又、惡しき業と假よも、心よ、行ふことと、思ふ  
べし、若し心よ、行ふことと、思ふとき、縦令

事には、出さざるとも、既に、行ひたるよ、同トと知る  
凡て、惡事、虚言より、始まるものあり、さきび、暫  
其身に、利益ありとも、決して、虚言はべし、  
言と以て、得たる利益は、他人の物を盗みたるよ、  
同トく、終るよ、其身の害とふるべし、  
む、一人の男兒、行きて、毎、狼来き、狼来き  
り、誰う出で、救ひ給へと、大に呼びて、途を走  
り、とき、真、狼の来きよ、他人の、出  
来りて、救ふんとふるよ、欺き得たりとて、大

よ、其人を笑ふを以て戯とまゐるあり  
 斯くまゐること、度々あり一が、ある日、眞ふ、狼来り  
 て、此男兒を食まんといは、  
 男兒は、大に呼びて、狼来  
 きり救ひ給へといへど  
 も、誰も、亦例の虚言ある  
 べしとて、こませ、救ふも  
 のおろし、ゆゑ終ふ、狼  
 のため、噛み殺された  
 り、故に、平生戯も、虚言



を以て人を欺くもの、適眞實のことと、話ると  
 も、信とあるもの、いりざれば、常々慎むべきこと  
 あらばや  
 此處を、何如ある家ありと、  
 思ふぞ○とき、書肆あり  
 爰に、三人の男、帽子を戴  
 きたる、二人の者、書籍を  
 買ふんがため、此處に、来  
 きるなり、一人は、既、一冊  
 の書と、購ひ得て、去らんと



一入を机上の書の價を定め居るあり、  
 今此二人の書籍を買ふに、何の爲ありや、家も歸  
 りて、ときと理會し己の知識を増さんとほれば  
 あり、書ふければ、知識を増すこと能はず、知識無  
 きとき、國の利益と興はこと能はず、故に、志は  
 る者、有用の書と、金と惜まざりて、ときを購  
 ふあり

此圖の男、手と持てる書を讀みて、其義を小兒  
 へ語り聞あしむる所あり○汝この小兒に能く  
 心を用ゐて、其語を聞くと思ふあり○此小兒に心



を用ゐて、其語を聞くと、見え  
 て、此男の語ることと、深く考  
 ふるさまあり、思ふに、今聞く  
 所、此書の中の尤大切ある  
 箇條あるべし○凡て、教を人  
 へ受る者、決して、倦怠の心  
 と、生じまじらば、倦怠の心を  
 生じるとき、直に、其顔色を見  
 ゆる者も、亦ときを知りて、懇  
 教訓はることあり、皆此小兒  
 の如く、心を用

めで、其話と、能く考ふべきことなり

第六

汝の猫の兒を愛する、又犬の兒を愛するか○  
我の猫も、犬も、其遊  
び戯るゝ所と見ることと好

めり  
總て、獸類も、稚き時、小兒の  
如く、遊び戯るゝことと好む  
ものあり、中には猫の兒、繩  
又ハ鞠を弄びて、能く戯き遊  
ぶなり○然きども、



獸類も、年老ゆきば、遊び戯ることと好む、人よ  
して、年長けたる後、遊び戯るゝハ、耻づべき  
ことと、けり、けりや、○さきば、老たる猫も、其兒の戯  
き遊ぶと見ることと好むども、其身に觸るゝと  
ととハ、喜ばざるあり、○老人も小兒の遊ぶと見  
ることと好むども、其身に觸るゝこととハ、喜ば  
ざるものゆゑ、小兒の遊び戯るゝとも、老人の身  
に觸き、又ハ、其椅子、机、あど、ハ、決して、手を着く  
べし

此小兒ハ、學校にて、善き生徒あり○汝ハ、此小兒



一、世言又、善き人

の、學校より、書と讀むと、聞きたりや○此頃始めて、ときを聞きたり

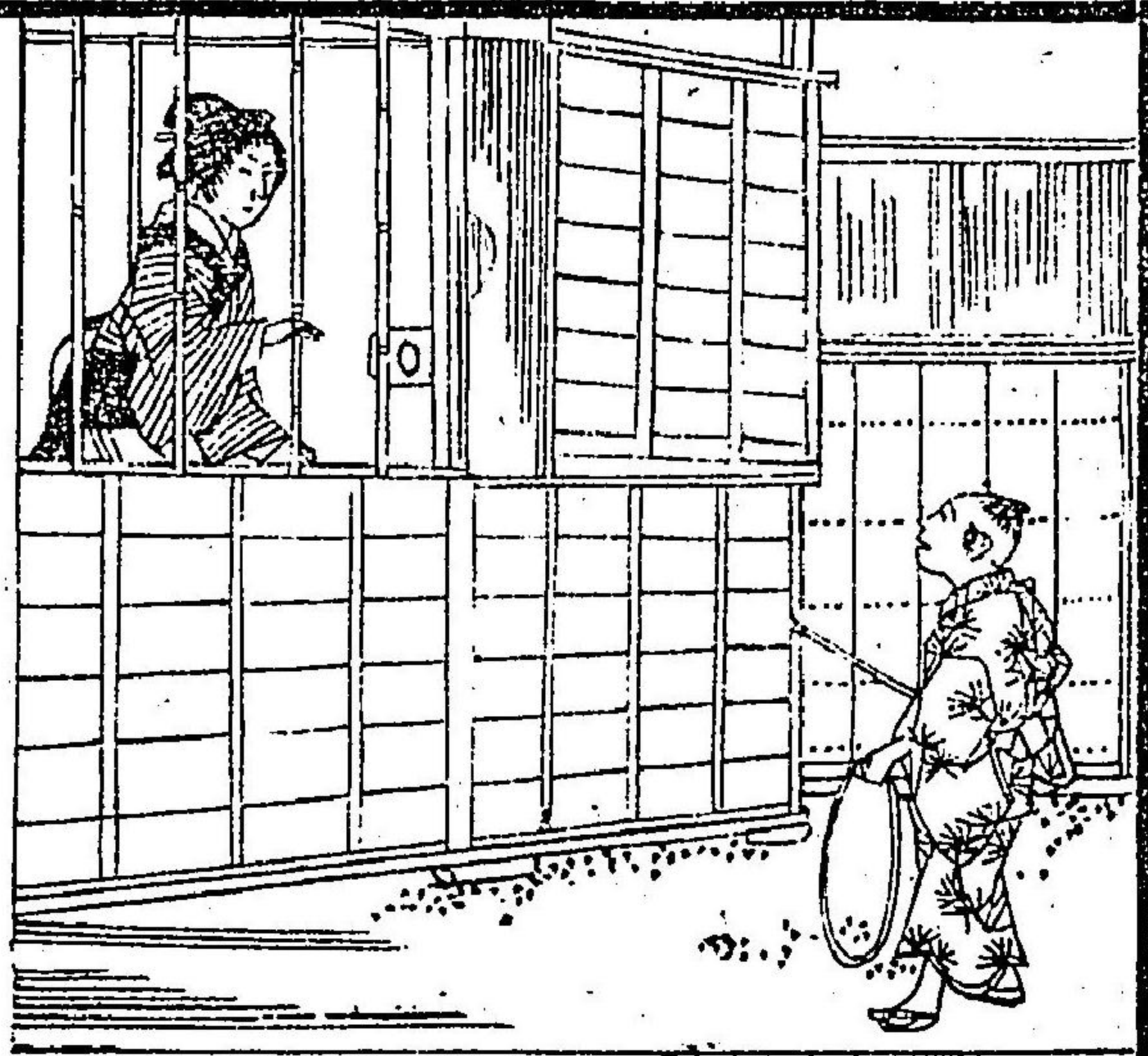
此小兒ハ、何の書と、讀めるや○彼ハ、小學讀本と、讀めり○其讀む所の、小學讀本ハ、何の卷あり

や○彼ハ、卷の三と讀めり、我ハ、この小兒の如く、能く書と讀むものと、好む、能く書と讀むものハ、後よハ、善き人と、おまじハあり○若、學問もあく、智慧もあくハ、いかで、善き人と、あることを、得べ

き、善き人と、あることを得ざれば、他人よ、愛せらるることあく、又、貴ハるることあく、爰よ、三人の小兒あり、一人ハ、机に向ひて、書と讀み、二人ハ、獨樂を廻ハいて、遊バり、獨樂を廻ハいて、跳り旋るゆゑよ、机を觸きて、其上の、筆筒を倒せり、書と讀む居たる小兒の心よハ、此二人の、戲を遊ぶと、何如よ騷



が、よく思ひ居るあらん、定めて、此小兒等の、他處  
 へ行かんことと、願ふふるべし  
 總て、人の、自好まざることを、人、亦好まざる  
 ものと、思ひ遊び戯るるにも、決して、人の妨と、あ  
 るべきことと、あはれべし、又自好むこと、人  
 も、亦好むものと、知りて、これをまづ、人よ讓るべ  
 し、さき、古き教へよ、己の、欲せざる所、人よ  
 施はこと、あはれといひ、又、己達せんと欲せば、人  
 と、達せしめよ、とも云へり  
 爰、遊歩に出でんとは、小兒あり、○汝、此小



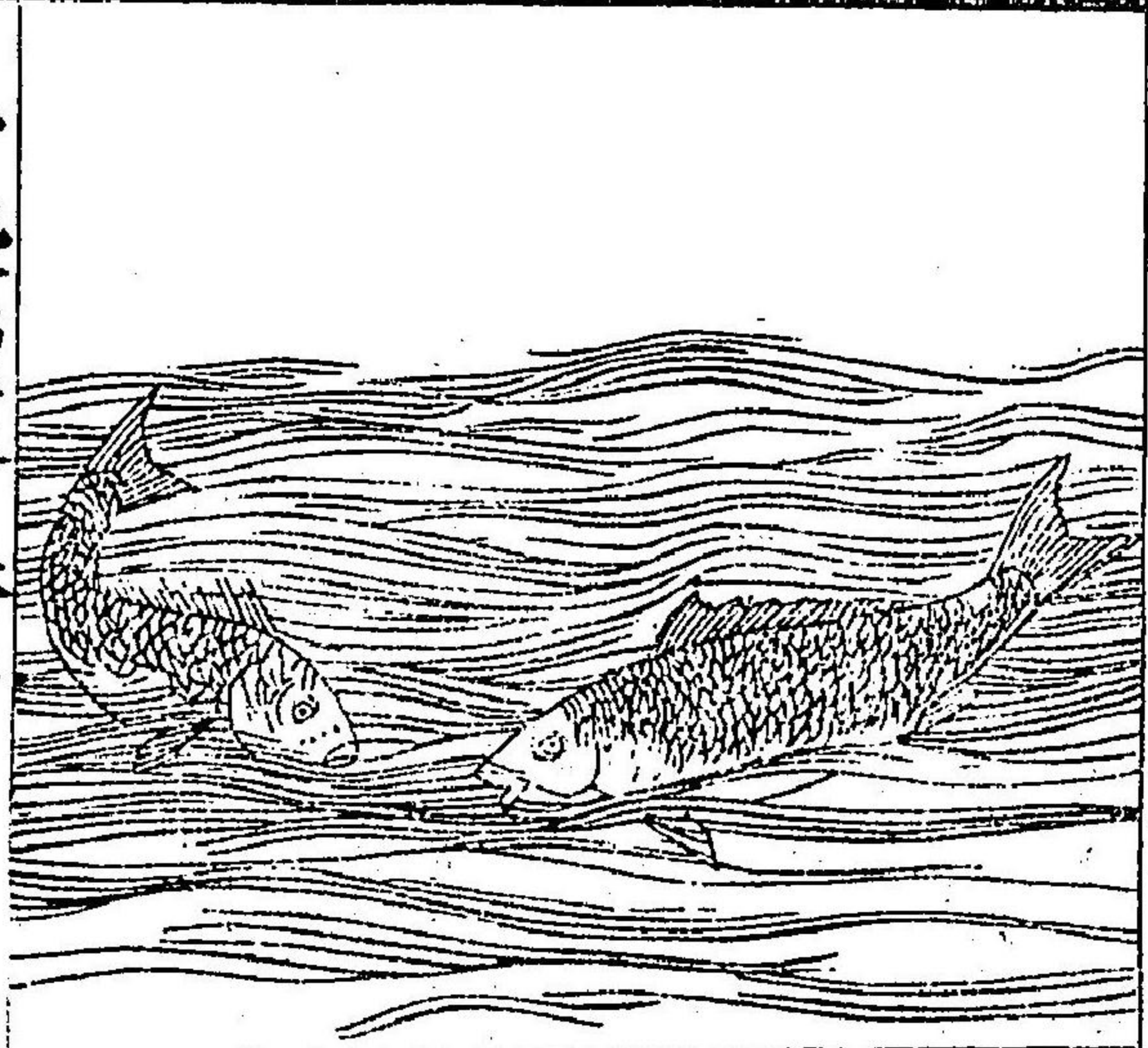
兒の、善きと、惡しきと、と、知  
 きりや、○我、人、本、其人と、あ  
 りと、知らばと、雖、今、遊歩よ  
 出でんとするに、其母よ、呼  
 び返されて、速、歸り来り  
 否、色あきと、見き、善き  
 もの、あるべし、其母よ、

呼び返されて、こきを、厭ふ心の、色よ、見  
 必、善きもの、よ、知るべし

此小兒ハ、未學校、入らざるか、○此小兒ハ、五六

歳<sup>ス</sup>も過ぎばと見ゆきば、未<sup>ス</sup>學校よへ、入らざるべ  
 し我<sup>ハ</sup>ハ此小兒の學校よ入りても、遊<sup>ブ</sup>歩の<sup>コト</sup>を好  
 まばして、勉<sup>ム</sup>めて書<sup>キ</sup>と讀<sup>ム</sup>み、成長の後<sup>ノ</sup>も、其善<sup>キ</sup>き人  
 たるを失<sup>フ</sup>はざらんことを願<sup>フ</sup>ふあり」  
 此圖<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>画<sup>カ</sup>けるハ、何物<sup>ナ</sup>ありや○ときハ、魚<sup>ナ</sup>あり  
 汝<sup>ハ</sup>ハ、生きたる魚<sup>ヲ</sup>と見たるべし○常<sup>ニ</sup>よ、これを見  
 る  
 汝<sup>ハ</sup>ハ、漁<sup>セ</sup>ることあるべし、何<sup>ヲ</sup>を以て漁<sup>セ</sup>しや○  
 釣<sup>ル</sup>と系<sup>ト</sup>とを以て、魚<sup>ヲ</sup>を釣<sup>ル</sup>ことあり  
 魚<sup>ハ</sup>ハ、水中<sup>ニ</sup>住<sup>ム</sup>むものゆゑ、水<sup>ヲ</sup>を離<sup>ル</sup>るときハ

其命<sup>ヲ</sup>を保つこと能<sup>ク</sup>ざる○魚<sup>ハ</sup>ハ、鱗<sup>ト</sup>と尾<sup>ヲ</sup>りりて  
 自由<sup>ニ</sup>水中<sup>ニ</sup>遊<sup>ブ</sup>泳<sup>ス</sup>し、又<sup>ニ</sup>全身<sup>ヲ</sup>鱗<sup>ヲ</sup>りるあり鱗<sup>ニ</sup>あ  
 きり、其鱗<sup>ハ</sup>も魚<sup>ノ</sup>よりて、大小<sup>ト</sup>を異<sup>ニ</sup>せり



汝<sup>ハ</sup>ハ、魚<sup>ノ</sup>の水中<sup>ニ</sup>あるとき  
 も、其目<sup>ハ</sup>ハ、よく物<sup>ヲ</sup>を見るとき  
 思<sup>フ</sup>ふら○然<sup>ル</sup>る水中<sup>ニ</sup>ても  
 よく物<sup>ヲ</sup>を見るときあり○何<sup>ヲ</sup>  
 以て、水中<sup>ニ</sup>ても、能<sup>ク</sup>物<sup>ヲ</sup>を  
 見るときと、知<sup>ル</sup>るや○も  
 し、水中<sup>ニ</sup>ても、物<sup>ヲ</sup>を見るとき

能はざる時ハ、必岩石ニ衝き當りて頭を傷くべし。然らざるものも、よく物を見ることが得きべかり。

人ハ水中にて物を見るとき、分明あり。魚ハ水中にて物を見るとき、分明あり。其目人と同し。魚ハ水中にて物を見るとき、分明あり。其目人と同し。

魚ハ水中にて物を見るとき、分明あり。其目人と同し。魚ハ水中にて物を見るとき、分明あり。其目人と同し。

空氣中にて物を見るとき、分明あり。其目人と同し。魚ハ水中にて物を見るとき、分明あり。其目人と同し。

物と見るは同じ。

今この男兒ハ家ヲ辭して、遠行せんとして、戸前の階を降りたるゆゑ、其妹も階を降りて、これを送り別々臨みて、互に言を贈答する所あり。

兄曰、汝慎みて、家を守り能く、其身を保つべし。火を過つことおうれ、病を生ぜることナラまきと。○妹ハ、吾兄寒暑を犯さべからず。又、久しく、他郷に止まるべからずと云ふ。





兄、又云ふ、予彼郷に到らば、速に書と以て、安否を  
報ぎべし、汝も亦其安否を報ぜよ、予が他郷に在  
る間、只汝の消息を得ると以て、樂とあはべき  
のみ  
汝等、此二人を何如あるものと思ふや○これ又  
同胞の孤あり、孤とい、幼稚のとき、又、両親を喪ひ  
たるものなり、  
此二人、早く、両親を喪ひたるゆゑ、今自身を立  
てんとほるあり  
今、この男子は、遠方へ行きて、幾年、妹と相見ること

とて得ばとも、文字を知するゆゑ、互に書簡を  
贈答して、其安否を審よはることを得べし  
も、此二人、文字を知らば、何は因りて、音信  
と通ぶることを得べき  
汝等、此二人の事を見て、能く文字を習ひ、勉めて  
書簡を作ることと、學ぶべきなり  
む、う、り、る、家、又、兄弟の小兒、り、兄は、七歳に  
て、弟は、五歳なり○兄は、其才最敏よ、して、心も亦  
優しきものあり、弟も、良き性質なま、ども、尚幼き  
ゆゑ、未世間の事と知らば、輒もそれば、過りたる、

舉動をあらはしとせり



ある日、兄弟とも、郊外へ出で、遊ぶに、ある家の籬より小鳥の巢に入り、親鳥への来るよ、驚き、て、飛び去りたり、兄弟へ、巢の中へ、窺ひ見るに、雛三羽あり、弟へ、悦びて、雛を取りて、持ち帰らんといふを、兄は、それを止めて、親鳥の子と愛はるを、父母の我等と愛し給ふよ、同ト今汝、この雛と、取り去らば、

親鳥の悲、何如か、若、我家へ入り来りて我等兄弟と、捕へ去るもの、うらむ、父母の悲を給ふこと、幾あるん、まゝしてや、雛を、親鳥の養ふ由りて、生長はるものにして、今人の手よりあはべ、決して育つこと、うらむ、うらむ、されば、今、この雛と、取らざることを、よけきと、論じけむ、弟も、其理を服して、兄の教を、随ひたり、此弟の、鳥の雛と、取らんとは、殺生するに、た、非きども、其理を論ぢれ、かくの如く、まゝして無益な、殺生するをや

舉動とありとあり

ある日、兄弟とも、郊外へ出でて、遊ぶるに、ある家の籬より小鳥の巢に入り、親鳥への来るよ、驚き



て、飛び去りたり、兄弟へ、巢の中を窺ひ見るに、雛三羽あり、弟へ、悦びて、雛を取りて持ち帰らんといふを、兄はそれを止めて、親鳥の子を愛はるを、父母の我等と愛し給ふよ、同ト今汝この雛と取り去らば

親鳥の悲何如か、若我家に入り来りて我等兄弟と捕へ去るもの、いづれ、父母の悲を給ふこと、幾まゝに、まゝしてや、雛を親鳥の養ふ由りて、生長はるものにして、今人の手よりかりまゝ、決して育つこと、いづれ、いづれ、されば、今この雛と取らざること、よき、いづれ、いづれ、弟も、其理を服して、兄の教を、随ひたり、此弟の鳥の雛と、取らんとは、いづれ、いづれ、殺生するに、た、非きども、其理を論ぢれば、かくの如し、まゝして無益、殺生するをや

されば、縦タテ、小コき蟲ムシたりとも、無益ムシギ、殺コロむべし。世ヨの理リと、知シらざる者モノの、小コき蟲ムシと、殺コロむを以モて、此コノ細ササの事コトとせり、實シツ、此コノ細ササの事コト、似ニたりと雖モ、こゝを殺コロさんと、思オモふ心を、即ス、此コノ細ササの事コトにあらば、この心ココロ、既ス、慈悲ジイを失ウシひたるあり、慈悲ジイを失ウシひたる心ココロ、漸ヤカク長キチぎに、至いたらば、畜チク類ルビと、殺コロむのこゝろ、終ツヒ、人ヒトを殺コロむの大オホ惡アクも、陷オチるべし、豈アニ恐オソまざるべけんや。

故ユ、殺コロ生シと、誠マコトむるは、慈ジ善ゼンの人ヒトとあるべき階カイ、一イチて、終ツヒ、類ルビまきふる、善ゼン人ヒトともあり、身ミの幸カウ福フク

と、得ウケるゝ至いたるべし

小學讀本卷之二終

深澤葵潭藏

